
D.C.II-Long Live Rock'n'Roll-

尾時山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C・I I I - L o n g L i v e R o c k ' n ' R o l l -

【Nコード】

N 8 2 3 7 S

【作者名】

尾時山

【あらすじ】

初音島に引越してきたギタリスト。「アンジェロ・ラッシュ」とテクニクで変態を見せ付ける！！（ボクのサイトのオリキャラが出てきます）

Prologue

初音島は、フェリー港。

芳乃さくらに雇われている神威創龍は、外国帰りの転入生を迎えるため、愛車のフェラーリ・458で港まで来ていた。

「アイツか……」

フェリーから下船し、ギターケースを持って下りて来る一人の少年。

創龍は、その子の傍まで歩み寄り、少年に話し掛けた。

「こんにちは。ようこそ初音島へ。日本語は解るか？」

「ええ。大丈夫ですよ。ちゃんと解ります」

「よかった、てっきり英語しか話せねえんじゃねえかと思ってよ。

名前は……確か……」

創龍がわざと忘れたかのように言った。少年は言う。

「成澤 彰。学園長の友人の孫です」 トランクにギターを置き、彰を助手席に座らせる。そのまま彰を風見学園まで送り届けた。

「転入手続き、済ませなきゃな。事務室はこっちだ」

彰をついて来させ、事務室へと入れる。ちょうど、担当の事務員が彰を見、手続きの紙にサインを促した。

「保護者が成澤 涼太か……。『Sorriso』の店長だろ？」
「はい。ひいおじいちゃんが建てたお店らしいですね」
「90でも未だに元気だぞ。しかもまだ厨房入ってるっばいからな」
「マジすか？」
Sorrisoとは、彰の親族が建てたイタメシ屋である。風見学園の生徒も良く入り、学生向けメニューなども作ったぐらいである。

「俺も良く行くしな。さて、お前ん家にも行くか」
「あ、はい」

学園を後に、再びフェラーリに乗り込む。

「待つて待つて〜!!」

その時に、金髪の少女が、フェラーリに駆け寄ってきた。「さくらっ」

創龍が、少女の顔を見る。少女は勝手に助手席のドアを開け、彰の膝に座る。

「な、何？」

「ああ、そいつ、学園長」

「芳乃さくら、亜紀人くんの友達だよ」

「ああ、さくらさん。おじいちゃんのお友達ですね……。随分綺麗な女性ですね」

「嬉しいなあ まあ、亜紀人くんと同年齢だけだよ」

「安心しな彰、精神面は身体と対して変わらん」

「ひどい言い方だね」

「あはは、でも綺麗なことは確かですよ？」

「お前、優しいな」

彰がさくらと一緒にシートベルトを締めたことを確認し、創龍は車を動かさしはじめた。

「成澤」という標札が付いた家へ着く。彰はさくらを下ろし、トランクからギターを取り出した。2シーターは不便だ。

彰がインターホンを押す。中からは、中肉中背の、中年男性が出てきた。

「おお、彰くんか！」

「お久しぶりです、おじさん」

「Sorriso」2代目店長・涼太が出て、彰を迎えた。

「ひいじいちゃんは？」

「店出てる」

「僕の荷物は？」

「ああ、下のスタジオに入れといたよ」

「スタジオなんてあんのかよ」

ただの一軒家だと創龍はずっと思っていた。まさか、スタジオがあつたとは。

「兄さんからのプレゼントも受け取ってるんだ。ほら」

「おお……」

一本のギターを受け取る。黒の貼りメイプル、ラージヘッドのフエンダー・ストラトキャスターだ。

「69年製の完全オリジナルだね。リッチイメージだろうねえ」

「リッチイ好きなのか？俺も好きだぜ」

「あの人は本当に凄いですからねえ」

創龍が笑いながら言う。彼もリッチー・ブラックモアをリスペクトして、白のストラトキャスターを買ったぐらいだ。

「とりあえず、中に入りましょうか」

「いや、俺はいい」

「そうですね？じゃあ、明日」

「あれ、創龍さん？それに、学園長まで……」

「うわ、めんどくせエ」

創龍が帰ろうとすると、隣の家から、赤い髪の女の子が出て来た。

「どなたですか？」

「学園の生徒。白河ななかつつう、めんどくせエヤツだ」

「めんどくせエってなによ!？」

「言葉通りだぜ」

「あ、成澤 彰っていいいます。よろしく」

「白河ななかですつ 確か、亜紀人さんのお孫さんだよね？」

「じいちゃんのこと知ってんの？」

「だってプロじゃん。世界的に有名だよ？」

「確かにばあちゃんと世界飛び回ってたけど……」

お前、自分のじいさんのことも知らねエのかよ、と創龍がツッコんだ。

「まあ、とにかく。明日から学校な。10月だが、もう寒い。風邪
気イ付けるよ」

「はい、ありがとございました」

「あ、君は学ランじゃなくていいよ、まだ買ってないだろうから、

「特別！」
「はい」

「んで……。白河さん？」

「ななかでいいよつ。私も彰くんって呼ぶし」

「ななかちゃん？」

「呼び捨てでね！」

「ななか？」

よくできましたー、と、子供をあやすように彰に言った。

「おお、やっぱり彰くんはモテるなあ」

「そんなんじゃないつて。友達作っただけでしょ」

「そう言うけど、結構かつこいいじゃん、彰くん」

「そう言われて、悪い気はしないけどさ」

彰が困ったように言った。

こんなことを言っただけでも、何も意味はない。彰は、自分のギターを置くため、家に入った。

「あ、待ってよお」

「いや、ギター置くだけなんだけど」

「ついでにギター聞かせてよお」

「だつてさ。聞かせてあげなよ」「解ったよ……。でも、笑わないでね？」

「笑わないよ！」

彰とななか成澤家に入る。地下室へと続く階段を降りながら、ななかが言った。

「地下室なんてあるんだね……」

「じいちゃんが昔使ってたんだってさ。完全防音のスタジオなんだ」
ドアノブを捻りながら答える。扉を開けると、そこには、大量の
機材があった。

「ふむふむ……。スタックも何も積んでない、と」

ギターケースを降ろす。すかさずななかをそれを開けると、白い
ストラトキャスターが出て来た。

「うわあ……。綺麗……」

フエンダーUSA純正のストラトだ。ラージヘッドに、スキャロ
ップ加工のネック。ピックアップは、シエクターのF-500Tが
二つ搭載され、センターはダミーになっている。

「ま、それがメインギターではないけどね」

スタックを組み終えた彰が言った。ヘッドアンプがマーシャルの
200W、キャビネットは上下とも1960と、マーシャルのフル
スタックである。

「メインは決まってるけど、気に入ってるのはこれかな」

十数個ある中のギターケースから、レザー張りのストラトキャス
ターを取り出す。今度はDEAN製のギターだ。

「マイケル・アンジェロ・シグネチャー。こいつに……」

アイワのオープンリールデッキと、BOSSのオクターバーを繋

いで、アンプに直結する。

「No Boundariesでもやるか……」

「いえーい!!」

ななががはしゃぎはじめる。彰はそれを見ながら、指を動かした。

「全ての音が聞き取れるかな？」

言った途端、ゆっくりしたテンポにも関わらず、高速で弦を弾いた。

「は、はあっ!?!」

ななかには指が見えない。それほど高速でピッキングしているのだ。

一音一音の粒立ち、クリーンさも相当なものだが、それよりも、速弾きが凄過ぎる。

凄まじいピックアップの切り替えと、スウィープでのいきなりのテンポアップに、ななかはただただ驚くしかなかった。

「ここから本番っ!」

今までも本番だろう、とツツコミたかったが、驚きすぎて口が開かない。しかし、彰の”本番”に、さらに驚かされることになるうとは、予想もしていなかった。

ネットに左手を高速で叩き付けている。下から、上から、交互に。

最早大道芸だろう、とななかは思った。

「あ、笑わないでくれたんだ」

彰の声に、笑う間さえなかった、と言っななか。少し呆然とし、
呟く。

「あんなの笑えるわけないって……。むしろビツクリするよあ
「そう?」

ハンマリングのみでピロピロとギターを鳴らす。呆れる程速く。

「速弾きしか印象にないよ……」

「だって、僕の大半は速弾きで出来てるし」

それでも、レベルが違う。一般的に聞く速弾きよりずっと速い。

「でも、ちゃんと基礎が出来ないと、これは出来ないよ」

「いや、基礎出来ても、あれは……」

ネットクに叩き付けているような技術のことを言っているのだろう。
その問いにも彰は答えた。

「ラッシュでしょ?練習すれば誰だって出来るよ」

「無理だって!!」

「出来るよ、諦めなければ」

ふふっ、と笑う。嘘だ、とななかは思った。

「人間、何でも練習すれば出来るようになるよ」

本心で言っているのかな？

ななかは彰に近寄り、彰の手を握った。

「何？」

「本当に思ってるんだ……」

「当たり前でしょ」

ななかは、人に触れることで、その人の心が読める。その力を
使って、彰の心を読んだのだが、彰は全て、心に思ったことを言っ
ていたのだ。

「じゃ、私にも出来るよね？」

「うん。練習、サボらなければね」

「私に教えてよ！私もギター弾きたい！」

「いいよ」

にこっ、と笑って彰は答えた。

「ギターやるんなら、ギター一方あげるよ。流石にこれと、あの白
いのと、さっきの黒のはあげられないけど」

「じゃあ、あのギターがいい！」

壁に掛けてあった、フェンダー製のストラトを指差す。

ピックアップはオリジナルのシングルが3つで、色はキャンディ
アップルレッド。ラージヘッドとブレットトラスロッドという、7
0年代生産のモデルだ。

メイプル指板のフラットなR。フレットはジム・ダンロップの大きな物に打ち変えられていた。

「いいよ。持って行きなよ」

脚立に乗り、そのギターを取ると、ななかに手渡す。

「アンプもいるよね。あとエフェクターか」

綺麗に積み重ねられていたアンプから一つ取り、そのよこのガラケースから、エフェクターを2、3個取り出す。

「アンプはマーシャルね。まあ、僕はマーシャルとエンゲル以外持っていないけど。あと、エフェクターは……。これは、ななかの好みで選んでもらうから」

所謂、歪み系のエフェクターを、マーシャルのアンプにセットし、ななかにあげたギターに繋ぐ。

ななかにピックを渡し、弾くように促した。

「これがクリーントーン。それで、これが」

黄色のペダルを踏むと音が変わった。歪みをかけたのだ。

「オーバードライブ。こっちがディストーション」

オーバードライブを外し、黒のマーシャルペダルを踏み込んだ。先程より、高音が強調された歪みになった。

「最後にファズ。かなり汚い歪みになるけど」

言葉通り、汚い音が出始める。歪みきって、最早音がわからない。

「気に入ったのはどれかな？」

ななかは、うん、と言い、ペダルを色々に変えながら弾いた。

「やっぱ、これかな」

マーシャルのディストーションを踏み、ペコペコと弾く。彰は了解、と笑いながら、ポリリウムをゼロにし、オーバードライブとフアズを外した。

「なかなかセンスあるね。ヘヴィメタルの素質あるかも」

「ヘビメタ？」

「僕も、ハードロックとか、ヘヴィメタル弾く人間だしね」

「へえ〜」

ピロピロと自分のギターを弾きながら言った。

「んで、明日からでもいいよね？教えるの」

「うん。ありがとう」

「お礼を言われるほどの事じゃないよ」

「でも、ギターとか貰ったし……」

「そのギター自体が貰い物だからさ、気にしないで」

彰は笑った。ちなみに、彼のギターは貰い物が多い。

「じゃ、私帰るね。本当、ありがとう」

「はいはい。また明日ね。学園でもよろしく」

「うん！」

地下室から玄関へとななかを見送ると、彰はまた地下室へ籠った。

主人公説明

主人公設定

名前

・成澤 彰

年齢

・15

誕生日

・2/23 (アンジェロ先生と同じ日)

身長

・175cm

体重

・60kg

髪型

・2011年現在のアンジェロ先生と同じ

演奏可能な楽器

・ギター

・ベース

・キーボード

・ Hammondオルガン

・ドラム

・ピアノ

・バイオリン

・フルート

・トランペット

主な演奏スタイル

・速弾きとクラシカルフレーズアレンジ、変拍子など

影響を受けたアーティスト

- ・マイケル・アンジェロ
- ・リッチー・ブラックモア
- ・イングヴェイ・(3) ・マルムスティーン
- ・ステイヴ・ヴァイ
- ・ポール・ギルバート
- ・リッチー・コッツェン
- ・ケリー・キング
- ・マーティ・フリードマン
- ・ジョン・ロード
- ・ドン・エイリー
- ・コージ・パウエル
- ・ビリー・シーン
- ・ティム・ボガード

使用楽器

ギター

- DEAN MABモデル
- DEAN ツインギター、クワッドギター、シックスギター
- Fender ストラト(主にラージヘッド)、テレキャス
- Gibson レスポールカスタム、フライングV、エクスプローラ、SG
- PLAYTECH ストラト
- Ibanez RG350EXZ Black
- PGM-FRM
- ARIA-PROII XX-DLX

ベース

- Fender プレジジョン
- Rickenbacker 4003

エフェクター

AIWA TP-1011

BSM RPA Major

他は適当

アンプ

Marshall Major 1967 200W+19060
AB

ENGL SAVAGE

Marshall Vintage Modern 2466

Marshall JCM800 2203

Marshall 1959 性格

・陽気、人の真似をすることもあるが、自分なりのユーモアを入れる

詳細

「アンジェロラッシュ」を完全にコピーした男。

祖父の成澤亜紀人（HP参照）よりギターが上手く、また楽器がマルちな為、亜紀人のバンドのサポートとして参加していた。

音楽理論を独自に学んだりしてプレイに織り込む。

両親は祖父のバンドのマネジメントをしている。

彼が初音島に来た理由は、祖父が過ごした地で生活してみたかったから。

上述の通り、アンジェロラッシュを会得、更にダブルギターやクワッドギター、更には左右対象にネックが6本あるシックスギターま

で作りました。

勿論アンジェロマウンテンも出来る。

彼は演奏中に何度か変身（速弾きやアレンジ）をし、またノイズをクビにする。（笑）

速弾きだけじゃなく、ちゃんとメロディアスなフレーズやハーモニクスもやれる。しかも自在に。

タッピングハーモニクスなども彼には屁でもない。

その超絶技巧から、人類超越とまで言われ、最終的には

「アンジェロ星から来た宇宙人」

とまで言われる。本人は時々それをネタにする。

Session 1 登校

「いつてきまーす」

翌朝、彰はギグバッグを背負い、アンプケースを持って家を出た。勿論、勉強道具はバッグに重ねてあるリュックサックに詰め込んである。エフェクターと共に。

隣から、ななかと一緒に、オレンジ色の髪をした女の子が出て来た。ななかは眠そうであくびをするが、彰に気付くと彼に挨拶を交わした。

「誰？その子？妹？」

「幼なじみの、月島小恋ついていきます。成澤彰くんでしょ？」

「うん、ななかから聞いた？」

「いやいや、音楽雑誌見てれば解るって。だって、成澤亜紀人さんのお孫さんで、サポートメンバーで入ってたし」「ああ。確かに取材が結構来たねえ。ベースとか、ギターとかやってたし、ばあちゃんにキーボード教わってたし」

小恋と話が盛り上がる。ななかはへえ、と声を上げた。

「それはギターでしょ？どんなの使ってるの？」

「DEANのマイケル・アンジェロモデルがメイン。後はFender純正のストラトとか」

「ギター速いんだよ、彰くん」

歩きだし、ギターの話へと移行した。彰は続ける。

「ストラトの他には、ジャガーとか、テレキャスとか、エクスプロ

ーラーとかかな。あとは、じいちゃんから貰ったレスポールカスタムと、アリスティデスの010」

「ほえ〜……。アリウムまで……」

「あれは半世紀経っても使えるギターだよ。勿論、ベースも0500持つてるし。ま、メインはビリー・シーン風改造プレベとか、リックンの4003とか」

「高いのばっかだ……」

「うん、全然わからない」

ななかの頭がこんがらがる。唯一判るのはストラトぐらいだ。

「昨日は貼りメイプル指板の69年製のストラト貰ってね。それで73年製のストラトをななかにあげたんだ」

「ななか、そんなの貰ったの!？」

「う、うん……」

大きな声でななかに聞く。価値を知っている小恋だからなのだろう。ズブの素人であるななかには、なにもわからない。

「因みに、それはいくらくらいで?」「貰い物だからわかんないけど、40万は超えるんじゃない?キャンディアップルレッドだからレアカラーだし」

「ほええ……」

つまりはヴィンテージ・ギター。しかも状態はフルミント(最高)だ。額を聞いて、ななかも驚いた。彰は苦笑いしながら言った。

「貰い物だから気にしないでいいよ。僕、結構貰うし」「さすが、その道の人……」

驚きは止まることを知らない。彰はピックを取り出して言う。

「ピックも貰うよ？僕は五角形の本鼈甲を使うんだけどね」

「1000円位するよね、そのピック」

「うん。家にいっぱいあるけどね。っていう訳で、ピックあげるよ。月島さんは指弾き？ピック弾き？」

「うーん、ピック弾きなんだけど、指弾きもチャレンジしたいなあ」

「じゃ、フィンガーピック三個あげるよ」

ポケットから本鼈甲のサムピックを三個取り出し、渡す。なかなかにも、ホームベース型のピックを渡した。

「クリアなトーンが特徴だよ。かなりいい引き心地なんだ。指弾きはアタックが簡単に得られるしね」

「成る程」

「分かんないよお……」

「かなりいい引き心地なんだ。指弾きはアタックが強く得られるしね」

「成る程」

「分かんないよお……」

「音の立ち上がり、って意味だよ。つまり、出す最初の音が力強く得られるんだ」

「へえー」

何となく分かった気がする。今度ちゃんと教えるね、と彰は言った。

「さて、さっさと行きますか。遅刻したくないし」

「そうだね」

「ってか、もう着くし」

目の前には、昨日と同じ、大きな校舎がそびえ立っている。

何故か冬でも咲いている桜並木。その中を歩く三人に、近づいて来る人が6人程いた。

「あら、小恋に白河さんと……」

「誰、その男の子？」

小さな少女と、スタイルがいい少女、そして一見したらチャラ男な少年に、不気味な雰囲気醸し出す少年。そして、濃緑の髪をした少年に、昨日会った創龍。

「オウ、彰か。小恋とも仲良くなったのか」

創龍だけ学ランではない。昨日と同じ黒いコートだ。

「マジモンの成澤彰じゃなか！創龍さん、何でこんなところに……」

「何だかんだ有名なんだね、僕」

「当たり前だろ！！ヤングの表紙何回飾ってたよ！！」

「しかもギター装備済みか。流石ギタリスト、というところか」

彰は困った顔をし、創龍を見た。

「どう受け答えすれば……」

「自分で考えるや。トーク下手か？」

「成澤……、ああっ！義之君が良く言ってる人か！！」

「夢のご対面ね」

知らねエ、と創龍は呟いた。義之が補足を入れる。

「X JAPANのギタリスト候補だった人ですよ。若すぎるからってSUGIZOが入りましたけど。後は、成澤亜紀人さんのお孫さんで……」

「てかお前、X J A P A N 聞くのか……」

別のところに驚く創龍。明らかにズレている。

「サイン下さい!!」

「いいけど……。取り敢えず校舎入ろうよ。遅刻しちゃうよ」

「俺が権力使って遅刻じゃなくしてやるよ」

「あ、教師なんですか?」

「まあな。この義之と、チャラ男の涉、んで変態の杉並と、杏に茜に小恋は、俺のクラスだぜ」

「へえ」

彰は適当に相槌を打った。ななかとクラスは違うのか、と自分の中で理解する。

「もともと別の教師が担任だったんだが、急に体調が悪くなっちゃまって入院しちゃったんだ」

「このクラス、楽だよ」

「確かにやりやすそうだね」

小恋が付け足す。彰は笑みながら返した。

「そっぴや忘れてた。お前はななかのクラスだ。詳しくは職員室行ってみな。案内するぜ」

「よろしくお願いします」

彰が笑みを絶やさず言った。

この少年、顔立ちは綺麗で、しかも性格もかなり良い。女性陣は彰を語りはじめた。

「あの子、イケメン過ぎ……」

「こりゃ、小恋ちゃんも惚れるかも〜!!」

「少なくとも、腕には惚れてるよ。あのギターテク、ベーステク、どれをとっても超一流だし」

小恋いじりが楽しみな小柄な少女・杏と、特に胸が中学生とは思えないくらい成長している少女・茜が、いつも通りイジろうとしたのだが、まるでイジれていない。

「やべえ、ビックリすぎてチビりそうだ……」

「俺もだよ、渉。ビッグスターと話せるなんて……」

義之と渉が意気投合する。ななかは終始頭に「？」が浮かんでいた。

Session 2 対面

「じゃ、着いてきてね」

創龍の案内で職員室に着き、担任の教師の背中を見ながら教室へと歩いていく。

それにしても、この校舎は広すぎる。絶対、何度か迷うだろう。

教室に着く。担任がドアを開けると、大歓声が響き渡った。

「せんせー！早く成澤くんを！」

「皆知ってるのかよっ！！」

彰はびっくりした。いや、彰だけでなく、担任もだろう。

「しょうがない、準備はしとくか……」

ギグバッグを開け、革のストラップをFender製のラージヘッドのサンバースト・ストラトに着ける。スキャロップの貼りメイプルネックに、SSSのレイアウト。トラスロッドの穴は見えない。また、ピックアップは完全オリジナルで、ゴリツとした、パワー感のある音。どうやら、69年製らしい。

ペグはシャーラーのM6N。チューニングの安定度は抜群だ。
「行くかっ！」

教師が先に入り、その後に彰が駆け込んで入る。アンプとエフェクターを置くと、まずは速弾きで皆の耳を潤す。

「来たあつ!!」

「どうも、成澤彰です。今後よろしくお願いします」

「白河さんの師匠だあつ!!」

「もう喋ったのかよつ」

ふふつ、と笑う彰。そして、真ん中辺りに座っているななかにウインクをすると、ピッキングをしながら喋りはじめた。

「近所の子は白河ななか。昨日ギターをあげました。73年製、フエンダー純正のストラトに、マーシャル製のディストーションペダル」

「うおおつ!?!」

徐々にピッキングのスピードを上げていく。しかし、彰はギターを見ずに、前を向いた。

「因みに僕はトレブルブースター派です。それに、テープエコー、ディレイ、オクターバー、ノイズサプレッサーとか。時々フランジヤーも使います」

「訳解んねえ……」

「だよね。ギターやってる人しか解らないもんね。だから、曲弾きましよう」

アンプ側のゲインを弄り、ボリュームを上げた。

因みにアンプはM A 1 0 0 H。マーシャルのフルチューブのヘッドアンプだ。

ぎゅいいん、と歪んだ音を聞かせる。そして、ハンマリングをし

ながら曲を紹介した。

「Yngwie Malmsteen」
「Never Die」

「Never Die」。イングヴェイ・マルムスティーンのアルバム「セヴンス・サイン」に収録されている、イングヴェイの代表曲の一つだ。

ところどころクラシックとダークネスな雰囲気を感じさせるこの曲は、彰のお気に入りの一つだが、ギターで弾くには難易度かなり高い。イングヴェイ・マルムスティーンの曲は、全体的に難易度が高く、この曲はまだ易しい方なのだが、それでも一般的には難しい部類に入るだろう。

イントロから歌メロに入り、大分簡略化してソロに入った。1弦のハイフレットのチョーキングビブラート。かなり音を揺らし、それでも音は切れることなく鳴っている。

それから即座に入るスウィープ奏法。3弦から1弦へのエコノミーピッキング、そしてハイフレットからローフレットへ。

クラシカルなフレーズは、レガート（滑らか）を意識して弾く。より美しく、繊細に表現する。

ピックアップの切り替えも凄まじい。高音域を強調するため、フロントからリアへ切り替える時も、自然に変えている様にしか感じられないほど、軽々とやってのける。かなりのテクニクが無いとこれは出来ない。

流れるように鮮やかなピッキングから、タッピングを使いアレンジをする。複数の音を混ぜた、ピアノの様な音だ。

音の粒立ち、ノイズの少なさ、それを作り出すピッキングの正確さ。ピッキングが上手ければ上手いほど、音の粒は揃うし、ノイズも少ない。

ビブラートをかけ、ローフレットにグリスしていき、曲を終えた。彰は身体からギターを離し、手に持ちながら、礼をした。

席で見ていたななかは、昨日と違うプレイを見て、とても面白そうな顔をしていた。

演奏が終わり、アンプの電源を落とし、ギターからシールドを抜く。クラスが驚愕で声が出せず、ただその行動を見ていただけだった。

「先生、僕の席……」

「あ、ああ！！白河さんの隣で！！」

言われた通り、ななかの隣の空席に移動する。ななかに、よろしく、といって、椅子に座った。

「昨日のあれ、やんないの？」

「ラッシュはあの曲には合わないからねえ。クラシカルにやる曲だから」

「そういえば、かなり綺麗な音だったね」

「歪みも少なくして、弾き方も変えただけなんだけどね。でも練習すれば簡単に出来るようになるよ」

「凄いなあ……。努力の鬼だねえ」

「何事も上手くやるには練習、練習、練習だよ」

マイケル・アンジェロの言葉を使ってななかに言った。練習は確かに大切だ。そして、練習の内容も大切だ。

「そっぴや、ギターの練習、いつやる？」

「うーん、今日の放課後辺りにでもやりたいなあ」

「ギターは持ってきた？」

「ないです……」

「じゃ、家に帰ったらやるっか。僕の部屋でいいよね？」

「うん！そっちの方がやり易そうだしね」

ななかは笑って言った。彼女の笑みに、周りの男子が見とれるが、彰は普通に笑い返した。

女子が彰に見とれ、ななかを羨ましく思った。なんでななか彰の隣なのか、と。

「ほい。そんでは今日のロングはクリパの出し物決めだよん。もう大体決まっちゃってるけど」

教師は職員室に戻り、学級委員が前に立った。

「やっぱり、成澤くんをメインにした、クラスでのセッションをやりたいよね」

「セッションって、僕以外に誰か楽器やんの？」

「じゃ、私ボーカルで！」

「ま、自動的にそうなるでしょうねえ」

ななかは真っ先に手を挙げて言った。彰はななかの歌に興味を持ち、彼女に聞く。

「なんか一曲歌ってみてよ！聞いてみたいな」

「うん、いいよっ！」

ななかは元気良く返事をし、歌いはじめた。

「君のことを思ってるのに、届かない想いを重ねて」

彰はストラトを手にし、即興でコード演奏し、雰囲気を出した。完全なクリーントーンで、優しい音色を出していく。

「もどかしいよ、この気持ち、せつなくて涙がひらり」

段々とその曲のイメージが伝わって来る。ストラトの、パワーがありつつも、優しくきらびやかなトーンに、美しい歌声を乗せるなな。

一人だけの教室、卒業式の後、寂しげだが、どこか明るさが満ち溢れている。

「いい曲だ……」

「感動した……」

クラス全員の心に響き、皆がほろりとなる。

「上手いなあ。僕、メタルとロックしか歌えないから、ブルースとかポップはあまり……」

「ロック？ やってみてよっ」

ロックと言っても、彰の場合はハードロックだ。一回シールドを抜き、先程のエフェクターをセットし、Deep Purpleの『Burn』を弾き始めた。

「おいおいマジかよ、路線が一気に変わったよ」

「いや、でもこのメロディーかつこよくねえか？」

「って、タマームか！」

Deep Purpleは3期、黄金期と呼ばれる第2期メンバーの、ヴォーカルのイアン・ギランとベースのロジャー・グローヴァーが離脱し、デイビット・カヴァデルとグレン・ヒューズという、素晴らしいヴォーカリストが加入した頃の曲だ。グレン・ヒュ

ーズはベースも兼任していた。

「The sky is red, I don't unders
tand!!
Past midnight I still see the
land!!
People are saying 'the woman is
damned, she makes you burn wit
h a wave of her hand!!」

中音域の声がよく出ている。ななかとはまた違う上手さだ。

「The city's a blaze, the town'
sonfire!!
The woman's flames are reachin
g higher!!
We were fools, we called her l
iar!!
All I hear!!」

ブレイクで溜め、彰がピックでボディを3回叩き、一気に放出し
た。

「IS "BURN"!!」

決め台詞のヴィブラート、太さ、どれを取っても素晴らしい。ま
た、ギターも忠実にコピーしていた。

「ずっと、こんな感じ」

ソロまで行かずに終わる。ななかが、成る程、と頷いた。

「つまり、ハードロックとヘヴィメタルは、ヴィブラートと大きな声なんだ。演歌みたい」

「本当。演歌とヘヴィメタルって、似たような曲も多いし」

意外だ。演歌とヘヴィメタルは雰囲気も同じな様に思えてくる。ななかは、自分向きな曲ではないが、それでも、面白そうなジャンルである、と感じた。

「決めた！ヘヴィメタル歌う！」

「マジか！！そりゃ嬉しい！！」

「面白そうだし、興味湧いてきちゃった」

彰とななかの仲が更に深まった。ヘヴィメタルとは、こんなにも人を繋ぐ力があるのか、と彰は思った。

ちょうどクラスの出し物が決まったところで、休み時間のチャイムが鳴った。クラスの出し物は、「ポップとメタルの融合を試みたセッション」、通称「ポップメタセッション」になった。

もちろんギターは彰が弾いて、ボーカルにななかを起用し、メタルな感じを演出しつつ、ななかポップな曲を歌う構図になっていた。

他のクラスメイトは、テンポが判るように電子音のビートを取ったり、ななかのコーラスに入ったりという役割になっている。

また、この出し物をやる際に、客に飲み物や軽食を提供することも決定した。勿論協力は Sorriso。ただ、作り方を教えるだけだが。

他クラスから、たくさんの生徒が彰を訪ねてきた。朝に会った義之や渉、小恋、杏、茜もその中にいた。

「ねえ、なんで私服なの？」

「いやあ、学ラン買う暇なくてさあ」

「というか、それライブで着てたやつじゃん！」

「そんなの覚えてないよー」

笑いながら受け答える。本人自体、何を着るのかはあまり意識していない。

「な、成澤師匠！サイン下さい！」

「あ、君は朝一緒にいてくれた……。義之くん、だっけ？あと、涉くんに、杏さんに、茜さん」

「覚えてくれたんですか！光栄ですー！」

「いやいや、君達こそ僕を知っててくれて、本当嬉しいよ。サインだよな？あまり書いたことないから、へたっぴだけどいいよね？」

「もう全然大丈夫っすー！」

準備良く色紙を3枚出された。

2枚なのは判るが、後の1枚は誰なのか解らない。

「よろしくお願いしますっ！！」

「お、音姉っ！？」

「え？お姉さん？」

ポニーテールの、本校生の証の制服を着た少女が、義之の隣に現れた。

「生徒会長の朝倉音姫ですっ！大ファンの一人ですっ！」

「ちよ、ええっ！？」

「こりゃまた凄い人が来たもんだねえ……」

色紙を取り、マジックでサラサラと書きながら言った。

「てか音姉、メタル聞くんだ……。あ、この人、幼なじみで、年上だから音姉って呼んでます」

「メタル好きだよっ！でも、成澤くんの泣きのギターメロディが素敵だね」

「ブルージーテイストの曲も相当練習しましたからねえ。音楽理論と、スケールを考えたフレーズで、良いものが出来上がりましたか

ら

「すげえ……。って、使ってるギターもすげえ!!」

義之が、机に立てかけてあるストラトを見て言った。因みに、彼もギターを弾くので、ギターの価値が判る人間だ。

「ロッドの穴が無くて、ロゴも新しいの……。68か9年製か!」

「9年製だよ。鳴りがとてつもなく良いよ」

「でしょうね!ピックアップもノーマルですか?」

「うん。てかさ、タメなんだから敬語やめない?」

「いやあ……。自然と敬語になりますよ……」

「お願い、敬語やめて」

「あ、ああ!」

満面の笑みで頼んだ彰を断れなかった。義之は内心ドキドキしながら、敬語をやめた。

「すげえ……。俺、今成澤彰とタメ口で話してるよ……」

「それが自然でやりやすいんだ。ななかは最初から敬語使ってないから、更に話しやすいし」「なんとまあ……」

「?なんかまずかった?」

「いや、なにもおかしくないよ」

むしろななかは正しい、と彰は言った。

「そういうわけで、フレンドリーに接してね。朝倉先輩も、よろしくお願いします」

「うん、よろしくね、成澤くん」 彼が望む、一番やりやすい形になった。彰は笑う。

彰の笑顔を可愛く思った女子達が、少し顔を赤くしながら笑み返した。

「うっわぁ……、イケメン……」

「女の子の心を掴みすぎ……」

彰の近くのななかや音姫、そして雪月花達だけが、その笑顔を普通に見ていた。

そして放課後。授業は、彰は要点のみノートに書き、自分流のアレンジを加えながら受けていた。一方のななかは、何がなんだか分からない、という感じで授業を聞いていた。

「さて、帰って練習しようか」

「そうだね。早く上手になりたいなあ……」

「その前に……。音楽室に来てくれないかな、彰くん？」

ギターを担いで立ち上がった時に、小恋が彰とななかを訪ねてきた。

「なんで？」

「私ね、バンドやってるの。ベースなんだけど。あ、ドラムは渉君で、ギターはいたんだけどやめちゃって……。代わりに義之が入ったの」

「へえ。それで、見に来てほしいって？」

「うん。それで、どんなレベルが見極めてほしくて」

「レベルなんて関係ないよ。楽しめりゃいいんだから。でも、面白そうだから行くって」

「私も行く！」

アンプとエフェクターも忘れず持ち、ななかと共に音楽室に行く。一緒にいないと迷ってしまいそうで、一人で歩くことが不安になりそうだった。

「おつ、成澤師匠！」
「わざわざありがとな！」

音楽室には、既に渉と義之が準備していた。彰はドラムがシングルバスなのを見て、少し残念がった。

「そんで、曲やるの？」

「ああ、LED ZEPPELINのWhole lotta loveを」

「なら、ツーバス踏まないと」

笑いながら言う。シングルバスでは流石に手数不足だ。

LED ZEPPELINのドラマー、ジョン・ポナムは、ツーバスがうるさくてメンバーに隠されてしまったくらいだ。

「いや、金ないから踏めないんだよ」

「学校に頼んでみれば？買ってくれるかもよ」

「いいのかなあ……」

「こついう時こそ頼んなきゃ。まあいいや、とりあえずやってみて」

そこらの椅子に腰掛け、義之達を見た。ボーカルはいない。それもどこか寂しかった。

いきなりギターソロから始めた。彰は注意深く彼等の演奏を聞く。

ドラムの安定さ、ギターのミスやノイズ、ベースのリズム。それらをちゃんと聞き取れるのは、やはりプロだからか。

「つと。ストップストップ」

「？」

彰が演奏を止めた。そして、立ち上がり、渉に近寄った。

「走ってるね。あと、もうちょい強く打ってみな？」

「マジか……。流石。大体、どれくらい強く打てば良い？」

「ちよつとスティック貸して」 スティックを受け取ると、渉よりかなり強くドラムを叩いた。

「こんくらい。逆に弱表現は」

渉のノーマルなドラミングより少し弱いくらいの力で叩く。やはり、プロだからか、明らかに音が違う。

「バスももつと踏もう。シングルなら、それを手数で補わなきゃ」

「な、なるほど」

「んで小恋ちゃん。もつと強く弾こう。フィンガーピックあげたよね？」

彰が小恋に近付く。小恋は今朝もらった本鼈甲のフィンガーピックを出す、人差し指と中指に付けて弾いた。

「なにこれ！？こんな簡単に強く出来るんだ！」

「ベースは目立たない分、はつきりと聴こえるぐらい強い音を出さなきゃ。ちよつと貸して」

小恋のベースを借りる。ジャズベースシェイプのボディだ。

フィンガーピックを、彰は更に薬指も着けて、三本指で弾いた。人差し指でも、かなりの音量が出た。それを三本指で速弾きする。

「え！？えええええっ！？」

「成澤師匠、自重自重！！」

「ね？フィンガーピックって凄いでしょ」

完全にビリー・シーンのコピー奏法だ。フィンガーピックを外すと、本鼈甲のホームベースピックを出し、義之へ近寄る。

「義之くん。ピッキング強化しよう。斜めに当ててたよね？カッティングでも無いのに、ピックを斜めに当てたら、無駄なスクラッチノイズが出て、クオリティが酷くなる」

「それは、日々やらないと身につかない範囲だよな」

「スウィープ出来る？」

彰の言われた通りにしようとする。スウィープは三本以上の弦を、余韻を残しながら一気に弾き抜くテクニクだ。運指をいかに滑らかに、そしてピッキングをいかに丁寧に出来るかが問題だ。

因みにこの場合のピッキングはエコノミーピッキングという。複数の弦を、ダウンまたはアップピッキングのワンストロークのみで弾くテクだ。スウィープでなく、コードを弾き抜く時も、エコノミーピッキングを使う。

「やっぱりね。スウィープだろうがなんだろうが、基本は、ピックは垂直に当てて弾くこと。エレキギターの音の出る原理は、弦がピックに弾かれ、その振動をピックアップが拾い、シールドを伝わってアンプに出力される」

いきなり音楽理論に突入するが、そこまで難しい事は話していない。

「弦が弾かれるとき、嫌でもスクラッチノイズは生じるんだ。ピックは弦を弾くとき、滑ってしまうからね。だから、ピックの角度を垂直にすれば、ノイズは最小限になって、より綺麗で粒立ちがいい音になる」

「なるほど。因みに、ノイズサプレッサーは？」

「外部的ノイズを処理して更なるクリーンさを追求したいなら入れてもいいかな。コンプレッサーも一緒に入れれば更によし。でも、

使わなくても、外部的ノイズはシールドとかでどうにもなるよ」

義之のギターを借り、一弦の3フレットを抑えて弾いた。ピッキングは確かに垂直。オルタネイトピッキングをしても、エコノミーで弾いても、常に垂直だ。そのため、ノイズが極限まで削減され、音の粒が綺麗に揃う。

「ね、綺麗でしょ？」

「ノイズが彼方に……。流石すぎる……」

義之が涙を流しながら言う。憧れの人のギターを生で見れたのだ、感動せずにはいられない。

「ちよ、大袈裟だつて」

「いやあ、いいもん見れたなあ……」

「そう言われて、悪い気はしないけど……」

「ね、彰くん。本来の目的忘れてない？」

「忘れてないよ。ギターを見るのも勉強になるしね。じゃ、そろそろ帰って、実際に弾いてみよっか」

「と、いうわけでバイバイ!!」

ななかが真つ先に教室から出る。彰は苦笑しながら、彼女に着いて行った。

Session 3 初レッスン

「よおし、ななか。ギター持ってきて」

家に着き、彰が玄関に入る前にななかに言う。昨日貰った”ヴィンテージ”物のストラトと、マーシャルのHaze15というフルチューブヘッドを持ち、彰の部屋に入った。もちろん、昨日貰ったマーシャル”ガバナー”も忘れていない。

彰は上だけTシャツに着替えていて、動き易そうな格好になっていた。

「じゃ、アンプとギターを繋ごうか。ディストーションも忘れずに」

彰にシールドケーブルを2本渡されると、ジャックにケーブルを挿し、ついでにエフェクターにはアダプターも着けて、いつでも音が出る状態にした。

「これでいいの？」

「うん。じゃ、まずはチューニングから合わせようか。チューナーもあるけど、耳で覚えよう」

彰は立ち上がり、壁のギターを1本取り、マーシャルのCLASS S5に繋いだ。

ギターはGibsonレスポールカスタム。60年製の黒い色で、レスポールにしては3.7Kgと軽量な個体である。

「こんなふうに、チューニングが狂っていると、基本は音が合わないよね？どんなに頑張ってもチューニングをしなければ音は作れない。」

だからチューニングをするんだ」

「なるほど」

「あと、ギターの説明をしよう」

レスポールのテール部分を膝に起き、ネックを支えて、ボディを見せた。

「弦は細い方が下、太い方が上になる。この一番下の弦が1弦。上に行くとも2弦、3弦、って大きくなって行って、最後の一番上が6弦」

試しにななかは6弦を弾いてみた。低音で、ゴリツとした音がなる。

音程は確かにどこかおかしい。ななかはヘッドにあるツマミを弄ろうとした。

「そう、チューニングをするときは、そのツマミを回すんだ。ペグって言うんだけど、奥に回すと弦が張られ、手前に回すと緩むんだ」

低い感じの音なので、奥に回す。意外とくるくる回ることに、ななかはイメージと違っていると呟いた。

「よし、音合わせだ。まず、1弦がE、ミの音」

彰がクリーントーンで1弦を弾いた。耳で合わせようと、ななかは音を聞きながらペグを回した。

「2弦がB、シ。3弦G、ソ。4弦D、レ。5弦A、ラ。そして6弦E、またミ」

次々に各弦の音を言う。ちゃんとクリーントーンで音を鳴らしながら。

6弦のチューニングが完了すると、ななかは彰を見る。

「次は何？」

「ピッキングを練習しようか。さっき言ったように、ピックは垂直に当てて弾き抜く。ノイズは歪ませて見れば判るんだけど」

試しに、彰はマイケル・アンジェロモデルのオーバードライブを入れ、斜めにピッキングしてみる。

音は鳴るが、鳴るまえにきゅっという音も入った。これがノイズだ。

次は垂直にピッキング。ノイズが極端に無くなり、音の粒が綺麗に解る。

「今のが理想。ピッキングにもいろいろ種類があつて、上から下に弾くのがダウンピッキング。その逆がアップピッキング。交互にやるのがオルタネイトピッキング」

「なあんだ、簡単じゃん」

「簡単じゃないんだなあ、これが。押弦が入ってくると、必ずどこか偏ってきたり、弦を間違えたりするんだよね。基本はオルタネイト、そして弦ミスリや空振りはないように、ピッキングの練習」
小さいことから、こつこつと大事に練習していくのが彰流。細かいところまで丁寧に練習すれば、テクニクは思う以上に上達するのだ。

「まずは1弦から、アップ、ダウン、オルタネイトを30回ずつ。

それから2弦、3弦とどんどん上の方に行こう」

言われた通りに始めるななか。彰はレスポールからシールドを抜き、別のギターに持ち替え、彼女の練習を見た。

「終わったよお〜」

ピックの持ち方も教えて貰い、彰の言ったピッキング練習を終えたななか。

ギブソン・SGスタンダードに持ち替えていた彰は、そのギターボディを、牛革のクロスで磨き、美しいチェリーレッドの艶を出していた。

「うん。初めてにしてはノイズが少ない方だったよ。素質アリかもね」

「本当!？」

SGのノブを弄りながらななかに言った。

ハンマリングでピロピロと音を出し、音量を確認する。

「ドライブもよし……」

彰の真似をしようと、左手の指を指板に叩き付けるが、音が小さく、また、指も速く動かない。

アンブから出る音に気付いた彰は、必死にハンマリングを試みるななかを見て、ぷつと吹き出した。

「なによお……」

「いや、やるなあ、と思つて。まだハンマリング・オンは早いよ」

「へえ……。ハンマリング・オンって言うんだ」

ピッキングをせずに音が出るため、ちょっと違ったアクセントが得られるが、素早く音を出すために彰は使っている。スクヤロップ

でなくても、音はピッキングした時と同じくらい大きい。

スキャロップとは、指板を抉って弦のタッチを軽くする、という意図でリッチー・ブラックモアがやり始めたものである。彼は深さのピークがブリッジ寄りに来ており、また6弦側に向かうに連れて凹みが浅くなっていく。

彼をリスペクトしているイングヴェイ・マルムスティーンもまた、スキャロップ指板のギターを使っている。しかし、彼は中心が一番深く、また、全体的に同じ深さの抉り方である。

「次は、指の強化。2弦12フレットに人差し指を置いて」

フレットを数えて、目的地に人差し指を置いた。彰はそれを見てアドバイスする。

「ゴメン、ポジションマークについて教えてなかったね」

「ポジションマーク？あ、この白いの？」

「うん。これはね、奇数フレットと、12フレットに着いてるんだ。後は、24フレットあるモデルは24に」

「なるほど」

続いて、フレットの抑え方についても説明した。

「指は出来るだけブリッジ寄りに置く。力はちょっと入れればいい。

あ、ブリッジは、お尻から弦を出してるところね」

「なんで？」

「音がビビるって言って、響きが悪くなるんだ」

解りやすく、短い答。試しに中心を押さえ、弾いてみると、確かに、何かおかしい。

「ね？フレットの押さえ方も大切なんだよ」

「細かいことが大切なんだね」

「そうなんだよ」

言いながら、彰もSGの指板に指を置いた。

「それで、この運指の練習法は、3弦の13フレットに中指、4弦14フレットに薬指、5弦15フレットに小指、って風にやるんだ」

試しに彰がやって見せた。滑らかな指の動きに、ゆっくりと出る音。先程のピッキングの要点も忘れていない。

「これをオルタネイトでやる。終わったら、1弦ずつ上にずらして、その次にまた戻り、最後に1弦下にずらす」

「わかった」

彰はデジタルメトロノームを引っ張り出して、ななかの前に置く。随分ゆっくりしたテンポで動かさしはじめた。

「リズム練習も兼ねてね」

「うん」

ピックを動かし始める。テンポに合わせてながら、指板をよく見、ピッキングする。

しかし、15フレットで弦を空振りしてしまい、失敗した。

「むうっ？」

「惜しい、手元もしっかりね」

最初からやり直し。今度はピックを見ながらだ。縦方向の移動し

かしていないのだから、指板はあまり見なくても大丈夫だろう、とななかは思った。

ななかの考えは正しかったようで、弦飛びもなく、スムーズに弦が弾かれていく。

「そうそう。判ってきたんじゃない？」

SGを片付けると、今度はエクスプローラを取り、丁寧に磨きながらななかを見た。ネックの反りなども確認し、試し弾きをして。

「うーん、いい音出すなあ、やっぱり」

エクスプローラの響きに満足し、ななかの練習のスムーズさに感心し、今日は結構いい日では？と彰は思った。

エクスプローラを拭き終わり、片付けると、彰は立ち上がり、スタックの影に隠れている、大きなギターケースを計3つ持ってきた。

ちょうどななかが終わる頃、彰は一つ目のギターケースを開けた。

左右対象に伸びる二本のネック。ストリング・ダンパーが着いており、また、シールドジャックとフロイドローズライセンスストレモロが二つ、ピックアップはシェクター・スーパーロックエエエが二つずつ付いていた。

ななかは、彰に終わったことを告げようとするため、彰に顔を向けた途端、彼女の口が半開きになった。

「え、なにそれ？」

「特注のダブルギター。ピアノからヒントを得たんだよ」

クロスで吹き上げ、ハンマリングで鳴らしながら、ななかに見せる。

「これは分離できる。ま、いっぱいあるんだけど、これは」

「こっちはちょっと少ないよ、と言いながら、二つ目のケースを開ける。

「大道芸……」

さっきのダブルギターの下に、同じシェイプのギターがまた二つ

着いている。下のギターにもフロイドローズ型のトレモロシステムが着いており、ペグが7つあるが、果して意味はあるのか。

「クワツドギター。これは6本しか持ってない」

「6本”も”じゃない？」

「これを更に発展させたのが」

最後の、特大のケースを開けた。クワツドギターに、更に真ん中から左右に二本のネック。しかも、12弦ギターであり、これもまたフロイドローズトレモロが付いていた。

計6つのシールドジャック。裏から挿す形だが、アンプも6つ必要だ。

「それはもう、ギターじゃないよね」

「シックスギターだよ。世界にこれしかない、僕専用ギター」

スケールの大きさ、発想センス、そしてボディシエイプ。どれを取ってもド迫力。

「勿論ベースもあるよ」

「作る意味が……」

「視覚的にも楽しんで貰わないとね」

片腕でシックスギターを頭上に持ち上げた。かなりの重量の筈だ、それを片腕で持ち上げる彰もどうかしている。

「彰くん、もう人間を超えてるよ」

「私の星では、赤ちゃんでも出来る、ってね」

「宇宙人!？」

「冗談を言う彰。しかし、そう信じてしまうなかがいた。信じてしまうのも仕方ないだろう。目の前のもの全てが普通じゃないのだから。」

次第に、自分が言ったことに、ななかが吹き出しそうになり、結局、吹いて笑い出した。

「宇宙人じゃないもんねえ」

「うん。人より面白いを考えるのが得意なだけだよ」

びつくり人間ショー的な何かにも出れる。いや、優勝さえ出来る。ななかがふと口に出すと、彰もそう思いながら、少し笑った。

「実際に弾いてみようか？」

「うん！」

かなりの幅広のストラップをつけ、6本のシールドを挿し、特注のシールド中継機に挿して、TP-1011からMarshall Major 1967へと繋いだ。

彼のMajor 1967は、VOX AC30のトレブルブースト機能を”自分で”組み込み、マスターボリュームを付けた改造アンプだ。パワー管のKT88から生まれる200Wの出力により、爆音がなり、エフェクターでドライブさせれば、最高のサウンドが作り出せる。

それを、400W近い出力をもつキャビネット「1960」で3段積みofスタックを構成しているのだ。鼓膜が破れるくらいでは済まないだろう。

「アツテネータで絞って……」

パワーをかなり落とす。そして、ハンマリングで、左右の弦を鳴らし始めた。

「凄いなあ……」

両利きの彰にとって、両手でギターを弾くことは朝飯前だ。しかも、握力がとんでもなく強いため、コードをハンマリングで弾いたりも出来る。

対角線にギターを弾いたり、12弦と組み合わせたりなどとした。片手で弾きながら、彰は冷蔵庫の前まで動き、500mlペットボトルのファンタグレープを二本取り、ななかに一本渡した。

もう一本は器用に片手で開け、キャップを親指で抑えながら飲みはじめた。

余裕そうに速弾きを見せながら、ファンタを飲む異様な光景。此処こそびっくり人間ショーの会場だ。

「わああっ!!」

口にくわえ、7弦のネックを持ち、下から上げ、頭上へと動かす。

これが大技「アンジェロマウンテン」である。

ファンタを一気に飲みながら、これを行う彰。

本当に人なのか、再び疑うなながそこにいた。

シックスギターを置いて、ハードケースにしまうと、飲み干したペットボトルを、ドア付近のごみ箱に投げ捨てた。

「ないつしゅー」

「いやいや」

壁にギターケースを建てかけると、また別のストラトを持ってなかなかの前に戻った。

少し黄ばんだ白色に、ヘッドに突き出たブレット・トラスロッド。プラスチックの四点止めネックに、メイプルスキャロップネック。

Fender USAのイングヴェイ・マルムスティーンモデルのストラトだ。ジャンボフレットに、デイマジオのHS-3をフロントとリアに乗せてある。

「ねえ、膨くんって、何本位ギター持ってるの？」

「数えたことはないけど、多分、Fenderのストラトは300本はあるんじゃないかな？」

「ひえええ……」

イングヴェイ・マルムスティーンも、200本のストラトコレクションがあるという。かなりのマニアでも、ここまでは集めない。

「DEANが30本、Ibanezが15本、Gibsonが20本、プレテクが4本だったはず。Aria Pro IIも気に入ってて、XX-DLXっていう、あの変形ギターを良く使うんだ」

壁の白いギターを指した。ハムバッカーのエスカッションに、無理矢理シングルコイル・ピックアップを積んだ物だ。指板はメイプルで、スキヤロップはしていない。

「でも、ギブソンに特注で、シングル3発のVを作ってもらったよ」「あれの隣がそれ?」

「そう」

ちょうどアリアの隣にある、赤色のフライングVをなかなか見つけた。赤と言っても、木目を出した美しいシースルーレッドだ。

XX-DLXとは違い、フロイドローズに、ロックナットと、シヤラーのマグナムロックを付けており、抜群のチューニング性能を誇るギターだ。また、これも、アリアも、片側六連のペグだ。

「このストラトはアーティストモデルで、弾き易くて結構好きなんだ。音も面白いし」

「どんな音?」

「通常、シングルコイルってのは、少しパワーが無くて、ノイズが多い。このギターのピックアップは、パワーが合って、しかもノイズも少なく、シングルコイルの特徴の高域も出してくれるんだ」

「へえ……。なんか、良くわかんないけど」

「聞いてみたら解るよ。後、これは指板がくぼんでるでしょ?」

ギターを渡し、指板を指す。全体的にU字状に深くえぐってあるのが、なかなかもわかった。

「なんで?速弾きと関係あるの?」

「ビンゴ。これはスキヤロップネックって言って、」

押さえる、っていうより、触れる事で、音を出せるんだ。後は、細かいチョーキングやビブラートもやり易い。ただ、唯一の悩みが、ネックが反りやすいところかな」

「ビブラートって、音が震えるあれ？」

「そうそう」

「あと、ネックの反りって？」

彰は、ギターのジャンクネックを、段ボールの中から取り出し、説明した。

「なんでネックだけ……」

「自作用にね。ネックってのは、弦の張力で、真っすぐになってるんだ」

「あ、大体解った。バランスが悪いと、反っちゃうんだ」

「そう。弦のテンションによって変わって来るし、湿気でも変わっちゃう」

木は、かなりデリケートな「生き物」だ。その木によって、音も、弾き易さも変わって来る。

「木製以外のギターもあるけど、木の音は木の音でいいんだよ。木の材質が違つと、鳴りも違うし」

「へえ。じゃあさ、軽くて、響く木って、どれ？」

「まさにそれだよ。ななかのストラトはアッシュっていう木で出来る。ライトアッシュは軽いし、サステインも良い」

アッシュにも色々ある。ホワイトアッシュやライトアッシュ。また、ストラトは主にアルダーかアッシュで作られている。

「ネックの反りは、トラスロッドで調整できるけど、なるべく僕の

ところに持って来て。音がおかしかったら、反りを疑っていいからね」

「わかった。でも、ギタリスト以上の仕事してるよね？」

恐るべき知識量。流石と言うべきか、何と云えば良いのか。「まあ、色々勉強したからね。音に常に貪欲であることと、楽しむことの為に、こういうのを学んだんだ。相当役に立つ知識だよ」趣味のための知識なら、覚えるのは苦ではない。彰の心境はそんな感じだろう。

「そっぴや、ギター以外にも、色んな楽器が来るはずなんだけど…」

言ったと同時に、タイミングよくインターホンが鳴る。彰は部屋のドアの横の受話器を取る。カメラが映し出すその姿は、まさしく運送業の人間であった。

「お荷物をお届けに伺いました」

「はい。ちょうど来たね。なかなか、手伝ってくれない？」

「いいよー！」

階段を上がり、玄関を開ける。バスドラムやハモンドオルガン、ベース、残りのアンプ、キャビネットが届いたのだ。

運送業者数人で、下の彰の部屋まで持っていく。全部の機材が積み込まれると、彰は包装を剥がし、ドラムを組み立て始めた。

「なかなか、そっちをその上に乗せて」

「うん」

ツীবスの巨大なドラム。シンバルやハイハット、タムタムが数多くある。

次にハモンドオルガンとシンセサイザー。スタンドを組み立て、シンセを乗せ、ハモンドの上にまた鍵盤とコントローラーを置いた。

ベースのスタックも組み立てる。ななかと一緒にスラントタイプを持ち上げ、ヘッドに Marshall JCM800 2001 BASSを乗せる。375Wの出力を誇るベースアンプに、300Wの1960を2段重ね。鬼の975Wをたたき出す。

しかし、中にはマーシャルだけでなく、エンゲルやゲッツ・ベッツ、ヴォックス、フェンダー、ヒューズケトナーなどもちらほらと見えた。

「うわあ、いっぱいだあ。良くこんなにお金あるね」

「貰い物とか格安商品とかしかないよ。もちろん新品もいっぱいあるけどさ。例えば」

適当に転がっていたマーシャルのVintage Modern 2466を持ち上げ、見せる。

「これなんか、ピッカピカの新品だよ。真空管も生きてるし」

「それは貰い物？」

「うん、モニタープレイで3台買ったから、1台あげるよ？」

「じゃあ貰う」

片手で受け取るうとするが、彰は両手で持つことを勧めた。

真空管アンプは30kg近くある。片手よりも両手の方が持ちやすく、安全だろう。

「オルガンは……。まあ、ばあちゃんから貰ったんだけどさ。色々改造して、300kgは超えちゃってるはず」

「ほええ……」

オルガンの前へ移動し、電源を入れて、鍵盤を押す。

少し歪みが入った音が鳴る。指を更に動かし、ベートーベンの「月光」を弾いてみせる。

「クラシックだ……」

「ここから！」

クラシックである月光から、ジャンルを変えて、Stiarrway To Heavenを弾き始めた。

「ブルース調に……。からの……」

ハードロックへと変え、Rainbowの疾走ナンバー「Fire Dance」のソロを奏でた。

ギターの時と同じ位、速く動く指。芸術的とも思えるくらい美しい指使いは、ななかを一瞬にして魅了させた。

「こんなもん。……ななか？」

「ずるいよずるいよ！そんなに出来るなんて！」

笑いながら、彰に言う。小恋が懂れている理由がわかった。

レベルの高いマルチプレイヤーであることが、懂れになるのである。

「凄すぎるよ。流石、プロ」

「ありがとう。好きだからね、音楽」

好きだけでここまでやれるのも魅力の一つだろう。

義之が涙を流したのも、師匠と呼ぶのも、解る。

それを、直で、しかも一対一で見れる自分はラッキー、そうなのかは思った。

Session 4 ジャム

翌日。昨日と同じ様に、小恋とななかと一緒に学園に行くところする時、小恋が彰に聞いた。

「ねえ、今日の放課後、ジャムらない？」

「どこでやるの？」

「音楽室だけど……」

あそこはスタックも組んでいないし、小さいコンボアンプしかない。また、渉のドラムもシングルバスしかないから、迫力に欠ける。

「ウチに来なよ。ウチなら、いくら音出しても大丈夫だからさ」

放課後、玄関へななかと一緒に向かい、靴に履き変えて校門へ行く。義之達がすでに待っていたのだ。ついでに、義之の幼なじみである由夢も一緒だ。

「よろしくお願いします、彰先輩」

「よろしく」

サインを貰って彰の家へと移動する。因みに、由夢の制服の背中にサインが書かれた。

「彰先輩、サインありがとございます!!」

「いいよ、気にしないで」

玄関を開けながら言う。祖父の信太が彰達を出迎えてくれた。

齡80にして、未だ現役の料理人。背筋は今も真っ直ぐである。

「お帰り、彰くん。お友達もいらっしやい」

「ひいじいちゃん、今日は休み？」

「まあね。後で料理でも持っていてあげるから、ゆっくりしていきなさい」

「出来たら呼んでね。僕も運ぶの手伝うから」

「ありがとう」

自室に行く前に言った。祖父想いの優しい少年、そう彼等には映った。

地下へと続く階段を下り、部屋のドアを開ける。スタジオが目の前に広がり、義之達を唾然とさせた。

300本以上のギター。巨大なスタック。そして、要塞と化したドラムとキーボード。ヴォーカル用マイクなどもセッティングしてある。

ななかも自分のストラトを持ってきており、昨日の2466を、開いてある1960に繋いで、エフェクターをセットした。

「こ、これ使っているのか!？」

「いいよ。ほとんどマーシャルだけど、ヒューズ&amp;ケトナーとか、ゲッツ・ベンツとか、メサブギーとか色々あるから、そっち使ってもいいし。エフェクターもいっぱいあるよ」

昨日のシックスギターをセッティングし、1967に繋ぎながら言った。

「それ弾くの!？」

「うん。小恋ちゃんも、自由に使っていていいよ。リッケンとか、プレベとかあるし」

「おお、ツーバス……」

「思う存分踏んでいいよ」

シックスギターを両手で弾きながら言った。義之達は、音の数で圧倒されながらも、必死に楽器をセッティングする。

「彰くん、練習は？」

「昨日のヤツと、後は運指練習のパターンを追加しようか。左手でやるから見ててね」

右手で別のフレーズを弾きながらも、左手でゆっくりとハンマリングで音を出した。4弦の12Fを小指で押弦し、そこから1弦の10Fを中指、3弦の9Fを人差し指……と言う風にする。

「あと、押弦を交えたエコノミーピッキングだね」

1弦10F、2弦11F、3弦13Fと、右手をピックに持ち変え、アップピッキングのみで弾き抜く。その次に、2弦11F、1弦10Fをダウンのみで弾き、その二つを合わせて繰り返す。

「結構運指の練習にも効くから、これを5回3セットずつ」

「OK」

教えると、再び両手でギターを構え、義之達を見る。

「曲なにやる？」

「Jet To Jet？」

「出来んの？」

聞きながら勝手にイントロを弾き始める彰。

「片手で……」

人外過ぎる。誰にも敵わないのではないかと義之は思った。

渉はツーバスに夢中になり、ひたすらドドコ踏んでいる。軽い力で強く打てるペダルを使っているため、連打がしやすい。

BPMを270に合わせても、変わらぬ安定感を見せつける彰。ギターブレイクで、両手で違うフレーズを奏でる。

そこからのソロは、アドリブを連発しながら、よりクラシカルに演出していく。6弦スウィープの精度を見せ、チョーキングでのキメフレーズへと流れるところもよりクラシカルだ。

「ビブラート、ハンパないな……」

美しさを表現する為に、ビブラートを意識しながらかける。揺れを細かく、速くすることによって、より繊細に奏でられる。技術力の高さが見受けられるものの一つだろう。

「次は？」

「ごめん……。まったく着いていけなかった……」

「ははっ」

軽く笑い、シックスギターの音を絞る。アンプのボリュームも0にし、ギターからシールドを抜くと、今度はまた、別のストラトに持ち替えた。

Fender・67年製のサンバーストカラー。ピックアップは

DiMarzio DP111に変えてある。

「安いピックアップだけど、かなりパワーがある音だから、ガンガンやらないと呑んじゃうからね」

67年製「暴れ馬」のストラトを持つ彰。本鼈甲ピックを持ち、弦を弾きながら、半音下げでチューニングした。

とても心地好い生鳴り。最高峰のアッシュにラッカーフィニッシュだからだろう。木の性格を表している。

「さあ、いこう」

Majorの音量を思い切り上げ、TP-1011のエコーを少し効かせる。

美しい音色を奏でるギター。眼を瞑り、音を感じながら、ハンマリングでレガートにキメていく。

ギターのポリウムを弄りながら、ギターサウンドを故意に変化させるバイオリン奏法。途中でピッキングを入れながらも、指でポリウムを弄り、アタック音を聞こえなくさせながら、リズムカルに弾いていく。

「綺麗……」

パガニーニの様な、中世のバイオリンを思わせる。彰の後ろに、ルネサンス時代のイタリアが見えた様な気がした。

皆がその気になっていると、急に彰はギタープレイを変え始めた。

乱暴なアーミング。我を忘れて、暴れ回るドライブサウンド。弦を走り回る左手とピック。

「ネオクラなら、任せなさい」

クラシカルでありつつ、メタルサウンド。彰のテクニックが活躍のジャンルだ。

メタルの音でありながら、クラシカルかつメロディアスに弾くこと。それが、ネオクラシカルメタルの特徴だろう。

リッチー・ブラックモアがクラシックを取り入れ、ウリ・ジョン・ロートがそれを完成させ、ランディ・ローズ、イングヴェイらが発展させた、メタルのジャンル。

速く弾くことも、クラシカルに表現する技術の一つだ。

彰はそれを得意とし、師である自らの祖父・亜紀人よりも速く弾けるのだ。

教わって3週間で、亜紀人より速いピッキングが出来、更に3ヶ月で、スウィープやビブラート等のテクニックが超絶的になった。

「速弾きしながらのビブラートって……、マジかよっ……!?!」

指板上で、手はビブラートを細かく、素早くかけながら、縦横無尽に駆け回る。勿論、右手も同時にだ。

「さあ……、これが、本職の本気……」

ピッキングノイズを更に少なくしながら、ボリュームを弄り、速弾きする。足元のボリュームペダルでも調整しながら、高度なバイオリン奏法を試みさせた。

「本当に、クラシックを聞いているみたい……」

「でも、ガンガンなメタルだよっ！」

なかなか影で練習しながら言う。スムーズなエコノミーピッキングが身についた様で、小恋を見ながらも出来る。成長速度はかなり速い。

彰の教え方が、なかなかの素質か、どちらだろう、と小恋は思った。

「ふうー」

締めビブラートをかけながら、ななかに次の練習を提示する。

「2弦の4と5に薬指と小指を置いて。それを動かさず、人差し指と中指で、2から3を、1弦から3弦まで押弦する」

「人差し指、薬指、とかもやるの？」

「うん。これは指の独立練習だから、最初はゆっくりでね。勿論、ピッキングとリズムマシンは忘れずに。5往復ずつを2セット」

なかなか考えられた練習だ。因みに、これはクロマチック練習と違って、その名の通り、半音ずつの音を出す練習である。

2日目のなかなかのギターの腕前は、昨日よりも格段に上手くなっていた。

なかなかのクロマチック練習を見ながら、彰もスケール練習を開始する。Cリディアン。彰は何にでもドミナントコードを多用する。また、使える物ならばなんでも使う。大移動スウィープや、逆手アルペジオ、タルカスなど、様々だ。

「次は？」

「すげえ、逆手でミクソリディアンかよ……」

どちらの手でも、どのようにしても、同じ弾き方が出来る。両利きであるから、この様な弾き方が出来るのだ。

「『Spotlight Kid』とか、そこら辺が義之くん達に向いてるんじゃないかな？後は、『Detroit Rock City』」

KISSの有名ナンバー『Detroit Rock City』のリフを弾き始めた。よくあるパワーコード。しかし、これが耳に残りやすい。

「シンプルだけど、なかなか影響のある曲でしょ？」

「簡単そうでもあるし、中々ウケそうだね」

小恋が試しにベースラインを弾いてみる。彰のRickembaker 4003を借りて。

「そうそう、歪みも軽い感じで。後、これはハムバッカーの方が良いかもね」

ストラトから、MABモデルへと持ち替える。HSHレイアウトで、音作りが多彩に出来る。

「ちょっとトーンを落として、リアで弾けば」

鋭角的な、突き刺さるリフ。義之と渉の中で、何かが湧いた。

「後は、『Crazy Train』。これも特徴的だね」

殆どコードだけで出来る、Ozzy Osbornの名曲。ランディ・ローズを意識して、彰はアルピーヌ・ホワイトのレスポールカスタムに持ち替えた。

コードから始まり、独特なスイッチング奏法。それに義之が着き、小恋と渉がリズムを作る。

一緒にリフを弾き、コードのベース。しかし、ここからは彰の独壇場であった。

ソロでも無いのに、アドリブを決めまくる。速弾き中心に、義之達を全速力で置いてきぼりにしてしまった。

忠実にコピーする義之は、彰の真似をしようとしても、ミスりたくないため、やめた。ソロまで、この調子で行こうと決めた。

肝心のソロ。ここはタッピング、プリング、ハンマリングを駆使して弾くソロだ。義之が指板に右手を置き、タッピングを開始する。

しかし、彰はフルピッキング。ノイズなしで、しかも音数を多

くして。

「先生、そこフルピッキングで弾くとこじゃないです」

「ピッキングで感じるのさ」

まさかのソロ延長。ペインタニック中心にアレンジを極めていく。

「やべえ、暴走してる……」

ランディ・ローズも泣く程のアレンジ。曲調を崩さず、尚も速く。

「ひゃあああ!」

最早自己満足。ワンマンショーになっている。

腕が有りすぎるのもどうか、と、考える義之。

ただ、曲自体は壊していないので、聞きたくはなる。

珍しくラッシュを入れず、落ち着いたプレイ。

テクをまざまざと見せ付けながら、ななかに学習させようと彰は試みた。

Session 5 魔法の手癖

「なんで、そんなに手癖が作れるんだ？」

色々な曲をやったあと、義之が彰に聞いた。

プロの話。実演を見た後で、それを聞けば、いい勉強になるだろう。

「ハーモニックやペンタ、ドミナントを二年くらい勉強したんだけど、弾いているうちに指板とか覚えちゃったんだよね」

「指板を！？」

「例えば、ドリアン。Cでいくと」

2弦の1Fがトニックになる。そこから3弦5Fまでゆっくりと転回させた。

「これとCのフリジアンとか似てるよね？こことここが違うから、これはドリアンだー、とかこれはフリジアンだー、とか覚えちゃう。後は、こういうのをうる覚えでね」

スケールブックを、近くの棚から取り出す。メモやらなにやらが沢山挟まっていた。

「これを見て、作曲とかもやるし、『練習方本』とかもこれで作ってたんだよ」

この歳で、教則本も出している。DVDやらも何本か作成しており、それでギタリストの養成もしている。

「あ、本屋さんに教則あるよね」

小恋がそれを思い出した。ベーシストの為の教則もあるらしく、彼女はそれを読んで覚えたと言う。

「あれって、スラップとタッピングくらいしかやってなかったよな」

「いやいや、ピック弾きと指弾きに分けて、必殺テクとかいっぱいあったよ!」

「ピック弾きの必殺?……ああ、ピックで弦を叩く、パシピックね」

ギターをアンプに立てかけ、近くのB・C・Richのベースを持つ。

ホームベースピックの側面を叩き付け、ぶつかった音を効果音にして出す。それを連続して、マシンガンの様にした。

「そうそう、それ!」

「これ、祖父ちゃんのライブ中にやったんだよね」

彰が言いながら平たい面でも叩く。今度はバズーカを意識したよっだ。

「後は、これだよな」

ベースでスウィープ。よくあるのだが、彰は逆手でスウィープしている。

「それは出来ないよ……」

「これは指弾きの方にも載せたような……」

ピックを啜え、人差し指と中指の側面でスウィープ。こちらの方が、指が滑って速い。

「手の付け根でもやれるよ」

「ごとごとと音を出しながら行う。笑えるくらいにスムーズだ。

「凄……」

小恋が彰の手元をじっくり見ながら言った。知らない内に彰の目の前にまで近付いていた。

「近いよ」

「あ、ああっ！？ごめん！」

顔を赤くして、離れる小恋。渉が彰を睨んだ。

「うわあ、視線が痛い……」

渉が小恋に惚れていることが、そこで理解できた。ななかは笑いながら彰に近付く。

「小恋のお気に入りになっちゃったねー、彰くん」

ななかの発言が渉に火を付けた。

「成澤師匠！！俺とドラミング勝負してくれ！！」

「へ？」

「一分間でどっちが多く叩けるか、勝負だ！！」

渉が小恋の前でカッコつけたいようだ。彰はそれを読み取ると、勝負を受け、ドラミングカウンターを設置し、スティックを出した。

「いきなり、何を……」

義之と小恋が困惑し始める。ななかが狙ったような感じになっていることも、彰は読み取った。

「先に渉くんから叩いていいよ」

余裕をかましながら、彰は言った。渉の眼が燃え始め、手が振られた。

これが彼の本気だ。ツーバスを踏みつつ、かなりの連打を見せる。

「なんだアイツ！あんなに出来たのか！」

「渉くん、凄いなあ……」

小恋と義之が湧くが、彰とななかは余裕そうに見ている。特に彰は、「それがどうした」と言わんばかりだ。

「どうだ！」

一分間経過。渉の本気が結果に出、フロアタムが80回、バスドラムが260回、タムタムが大小合わせて20回、スネアが120回。合計、480回。

「へえ……。まだまだだね」
「んなぁにい!?!」

彰が煽り、渉が眼を見開く。ドラムスローンに座ると、スティックをくるくる回しながら、彰は自信に塗れた顔をする。

「行くぞ、彰……。スタート!!」

義之の声と同時に、ツーバスが連打される。

スティックが、軟らかくしなる手首により、スネアを絶え間無く叩き続け、時々クラッシュとライドを乱暴に叩く。

バスは止まない。明らかに、渉より速い。

「せ、セコいなあいつ……」「ばっきやろう! 同じ条件だろう!!」

タムタムとスネアのコンビ。手首と足がロボットの様に動く。

「あと10秒……」

更にテンポアップ。ビーターが見えない。カウンターは眼が回るスピードで数え続ける。

「はい終了ー」

止めに、後ろの銅鑼を、銅鑼用の杓で思い切り叩いた。

「回数は……。バスドラム670……。はぁ!?!」

この時点で彰の勝利。だが、スネアも200、タムタムは180、フロアで140、クラッシュ、ライド、ハイハットが70ずつ、銅鑼が1の、計1401回。

化け物の領域である。渉が地に手を付け、圧倒的な力の差に平伏した。

渉とのドラミング対決から、翌日。渉に逆に尊敬され、それを快く思った彰が、空きのスネアにサインを書いて渡すと、渉に抱き着かれ、キスされそうになった。

幸い、義之が止めに入ったおかげで、渉と義之の熱いベージュが見られた。彰達は腹を抱えて笑った。

ここは彰のななかの教室。勿論、ギターを忘れていない。今日のギターはESP Crying Star Classic。通称クラクラちゃん、Suingネチャーモデルだ。

「えーっと、曲は大体決まりました？」

「うん。こんなセットリスト」

ガチガチのメタルリストを渡した。所謂ジャパメタと言われる曲が多い。

「お馴染みアンオンンやら、ド○え○ん、水○黄○、嵐とかをメタルカバー。後はラウドネスを中心に」

「はあ……。Crazy DoctorとS.D.Iに、Soldier Of Fortuneですか……」

代表曲の三拍子。彰がCrazy Doctorのリフを弾き始めると、ななかが歌詞を見ずに歌った。

背中合わせになり、弾く彰と歌うななか。息ピッタリの二人が、シンク口を見せ付ける。

「鬼上手……」

仲良し二人組。しかし、ちゃんとユニットになっている。

「タッピングは？」

「クリーンで弾けいっ！」

ブースターを切り、クリーントーンでタップする。高崎晃を忠実に再現している。

「僕がリードギターやるから、君らはリズムギターと、ドラムと、ベースと、ボードをやってね」

「勿論、教えてくれますよね」

「うん。体育館借りて、練習会を開こう」

大規模なギタークリニックだ。彰がクラクラちゃんを担いで弾きながら言った。

「因みに、ピアノとか出来る人？」

2、3人いた。彰はそれら呼び出し、握手する。

「シンセとオルガンを使って、やってもらっからね。楽譜は……はい。後で練習しよっか」

「はい」

贅沢な練習。彰のレベルまで到達出来るか心配だが。

「軽食係は……。いたいた」

学級委員が軽食係を指す。

「調理室、取れた？」

「うん、余裕。サンドイッチとか、コーヒーとかの材料は、成澤くん家経由で」

「ひいじいちゃんのOKサインも出てるからね」

手癖ドリアン。指板を見ずにだ。

「トラックで機材も持って来たし、今から練習出来るけど、やる？」

トラックは創龍提供だ。流石便利屋、と彰は思った。

「やりたい!!」

満場一致。彰はクラクラちゃんをギグに入れ、1959を持って体育館に移動した。

「ギターの子、ここはハンマリングで鳴らして」

彰の楽曲指導。ななか、自らのCARストラトを弾きながら、それを見る。

「ななか、ハンマリングとプリングの練習」

「「じつでしょ？」」

見様見真似でやってみせた。この前よりも指の自由度が違つ。上質な鳴りが体育館に響いた。

「これがお手本です」

ななかをクローズアップしながら言う。彰はベースを持ちながら、ギターやドラムを指導している。

「ベースは押さえてベベベやって。ノイズは指弾きだと気にならないから、指で弾いた方がいいよ。ドラム！！そう！パワフルヒット上手いね、君！！」

あちこち忙しい彰。ななかはビブラートの練習をしながら、彰を見る。

楽しそうなその姿。まるで、遊びのような感じ。

「白河さん？スケールアウトしてるよ」

「あちゃあつ、やっちゃった」

ビブラート自体はミスってはいないが、スケールアウトは曲を壊す。彰はななかに近付き、指導した。

「ベンディングのビブラートでミスった？」

「そこらへんかな」

「バンドをちょい低くしてみなよ」

言われた通りにやってみる。自然な感じの音が鳴った。

「どっ？」

「良い感じ！！」

笑い合いながら話す。彰はベースでもベンディングビブラートをしながら、なかなかと合わせた。

「これも慣れなんだけどね。一日二日じゃ、なかなか出来ないんだよ？」

「じゃあ、私って凄いの？」

「かなり」

ベースで暴走しながら言う彰。ビブラートは、長い年月を掛けて、完成形に持つて行く技術だ。それをこなしてしまうなかなか未恐ろしい、と彰は思った。

3フィンガーで、ベースラインの手本を見せる彰。ベース担当グループが、2フィンガーで落ち着いているところを見れば、彼等の必死さが解る。

練習は休み時間も行われた。疲れた者は休んでいるが、やる者は、彰に近付いて必死に練習に励んでいた。

クラクラちゃんのポリウムとトーンを弄りながら、音の明瞭さや、表現方法を説明している。

「バッキングはポリウムを少し下げて、アンプ側のベースコントロールを少し上げた方がいいよ。下から持ち上げる感じだね。ピックアップのポリウムは7とか8あたりかな？」

「ジャキジャキ感を出したいんだけど……」
「リアのピックアップは普通パワーがあつて、『ザクザクッ!!』って音が出るんだ。だから、リアにして、トーンとミドルを上げてみれば良いんじゃない？ 後、ゲインを少し上げて見ても良いと思う」

皆には、彰がマーシャルから無料で提供された「JVM410H」を貸し出している。4チャンネルのモードがあり、アンプのみで、幅広い音作りが可能だから、彰はこれを選んだ。

足りない分は、これまたマーシャルのパワーアンプ「EL34 100/100」に、シールド分配機を使ってダイレクトボックスに繋ぎ、体育館のスピーカーから音を出している。ダイレクトボックスの方には、プリアンプも付けているので、音は自在に作れる。

「彰くんの音作りって、どんなの？」

「MAJORはポリウムは状況に応じるね。後はトレブルを7、

ミドルを4、ベースを2、プレゼンスとゲインは0」

更に、TP-1011の内蔵マイクでプリアンプ代わりに、そしてMajor自体にはハイパスフィルター等が積まれている。ブラックモアと同じセッティング・改造だ。

「後は、秘密」

勿体振る彰。隅々まで教えてしまったら、皆自分になってしまう。しかし、アンプの改造までやらないと、絶対に彰の音は作れない。

その改造も、難しいのだ。ハイパスフィルターの正確なフリークエンシーを取ることはほぼ不可能であるし、VOX AC30の部品なども使われているからだ。ここまでも、ブラックモアの音と似ている。BSMという、ドイツの会社のブラックモアのブースターを使えば、その音に迫れるのだが、やはり、ブラックモアと同じセッティングでないと、音は作れない。

彰は、リッチー・ブラックモアの音が一番好きだ。奏法はマイケル・アンジェロ、イングヴェイ・マルムスティーン、クリス・インペリテリ、ポール・ギルバート、ステイプ・ヴァイ等を参考にした。しかし、音はリッチー・ブラックモアとマイケル・アンジェロの二つしか参考としていない。

イングヴェイとインペリテリは、ミドルが出た音、ヴァイとポールはドンシャリに少しのミドル。ウリ・ジョン・ロートは訳が判らない。

リッチーはトレブルブーストのとても印象的なディストーション・サウンドを生み出し、アンジェロは、イングヴェイやインペリテリ

等とはニュアンスが違うへヴィな音を奏でる。

それに、リッチーはいつでも音が面白く、美しい。狂気のプレイをあの手でされたら、舞い上がってしまいそうだ。

今となつては、リッチーは過去の人物。もう聞くことは出来はない。

なら、自分でリッチーを作ってしまった方がいい。リッチー・サウンドと彰の嵐の様なプレイは、こうして生まれたのであった。

彰は、このサウンドプレイを『ブラックモスト・ミュージック』と呼んでいる。「Blackmost（最高の黒）」のサウンドだ。

音も演奏も贅沢に。ここまでしないと気が済まない。そして、ここまで揃えられたのは、彰の努力の結果だ。

彰のサウンドは、彰に惹かれたローディーや技術者、そして、リッチー・ブラックモアのギターやアンプを改造していた「ドーク」の子孫が協力して出来た。感謝と尊敬の念を互いに抱く彼等は、最早「兄弟」と言っても過言ではない。

因みに、彰のアンプは殆ど改造されている。1959だろうと、1987だろうと、JCMだろうと。

「彰く〜ん!」

クラクラちゃんを半音下げにした後、ピッキングで強弱を付ける手本を見せようとした時、なかなか彰に話し掛けた。ななかは自分の真っ赤なストラトを背負っている。

「彰くん、オーバードライブ貸して？」
「いいよ。確かコンテナに」

言いかけた時、何人かの大人が彰に近付いてきた。
彰のローディーとギターテクニシャンだった。エフェクターやメン
テナンスアイテムなどを渡しに来たのだ。

英語で彰とその人達が話しはじめた。ちょうど、ななかのオーバ
ードライブの話をしている様だ。

「この子が、オーバードライブを使いたいんだって」
「使ってるのは73ストラトだね。ピックアップもオリジナルの、
グレイボビンのやつかい？」
「うん」

今はガバナーで歪ませているよ、とまで付け加えた。

なら、とローディーはAnalogman DOD 250を
ななかに渡した。イングヴェイ・マルムスティーンも使っていた、
初期型の物である。

「コレハ、トテモイイオーバードライブデス」
「ありがとうございます」

慣れない日本語で、ローディーが説明した。ななかがそれを受け
取りながら、笑顔でお礼をした。

「ななか、なんでオーバードライブに興味を持ったの？」
「ディストーションの歪みより、オーバードライブの方が好きにな
っちゃって。昨日、彰がやった『Never Die』の原曲を聞
いたら、そのギタリストの音がね」

イングヴェイ・マルムスティーンの音が気に入ったようだ。ななかはネオクラシカルメタル向きかな、と彰は思った。

「彰くんよりは遅いけど、あの速弾きも凄かったよ。関連動画の『Seventh Sign』っていうのも、凄かった」

イングヴェイ屈指の難関曲である。大移動スウィープと連続スウィープ、そしてビブラートが肝となる為、テクニクと表現力が諸に出る。

彰はピッキングの強弱表現の手本を少し置き、『Seventh Sign』の大移動スウィープを始めた。

「じつでしょ？」

「そうそう、それぞれ！」

本人よりも滑らかなフィンガリングとピッキング。勿論、ピッキングの角度は垂直である為、粒が引き立ち、ノイズが少なく、そして一音一音綺麗にスタッカートが決まる。

「流石あー!!」

「ついでに、これでピッキング表現もしよう」

先程のスウィープを、デクレッシェンドとクレッシェンドの繰り返し。これにボリュームペダルでバイオリン奏法を加えれば、更にクラシカルになるだろう。

流石にこのソロ中にボリュームノブでのバイオリン奏法は難しい。出来なくはないが。

「流石彰、手癖だけじゃなく、一音一音、美しい表現だな」
「ありがとう。この音が作れるのも、貴方達のおかげだよ」

英語で話す彰。どんな演奏も、一人だけでは出来ない。いつもそれを忘れず、感謝の気持ちを胸に抱く。魔法の手癖は、ここからも作られている。

S e s s i o n 6 R ・ M ・ B ・ C ・ F

クリパ三日前。彰のクラスは、練習も準備も着実に進んでいた。

放課後に、ななかと二人で、音楽室で別の曲を練習している。

この日の彰のギターは、54年製のテレキャスである。3トーンサンバースト、ローズ指板の物で、ピックアップは純正品だ。

「これが、イオニアンで、特徴が」

五線黒板に、音階とタブなどを解りやすく書く。この解り易さは、ななかレベルである。

「これで、理論は大抵終了」

「あとで、スケールブックも見せてね」

「うん。今日はおまけに、ペンタとブルーノートとか使って、ブルースやってみるよ」

Fender Twin Reverb のボリュームを上げ、トーンを穏やかにするため、トレブルブーストを切る。アンプのナチュラルな歪みを得ると、スローテンポで、ブルージーなアドリブソングを奏でる。

出力の低いピックアップで、クリアな美しいトーンを紡ぎ出す。決してオーバードライブやディストーションをかますようなことはない。

ピッキングも、音の芯がなるし、とても太いネックから、ネックの鳴りが伝わってくる。

彰のブルースギターの手本は、エリック・ジョンソンやジェフ・ベック、エリック・クラプトンなどだ。カントリー、フュージョンもエリック・ジョンソンをヒントにしている。

また、スティーヴィー・レイ・ヴォーン、ロリー・ギャラガー、ジョン・メイヤーなども、ブルースの名手として好きだ。

フィンガーピッキング、ネックピッキング、カッティング、レイなども上手く使い、彰のブルースの世界観も生み出した。

次第に音楽室に人が寄ってきた。なかなか聴き入っているのと同じく、オーディエンスも魅了されている。

ビブラート、アーミング……。決して乱暴にせず、しかし、力強いアクセントを。いつもよりはスローだが、ほんの少しだけ速弾きも混ぜた。

「綺麗……」

気持ちいいくらい清々としたサウンド。最終的にはクリーントーンで攻められた。

「いい曲だ……。何て言うんだらう……」

「アドリブらしいよ？」

「即興なのっ!?!?」

ナチュラルハーモニクスと共に、アドリブ演奏を驚く。彰のビブラートに惹かれる様に、観客も段々と増えていった。

タップハーモニクスを入れてみよう……

ハーモニクスを多様するブルースは、あまりない。奇抜なセンスが随所に伺える。

ZEPPELINの曲のフレーズからも抜き出したりと、R & amp; Bなども演奏出来ることから、更に彰の能力の凄さが解る。

「よいつと」

適当に締める彰。終わった瞬間、オーディエンスが湧き、音楽室になだれ込んできた。

「あつらあ……」

「凄い人の数だねっ」

倒れながらも拍手が鳴り止まない。ギターのノイズより騒がしい。

「ちょうどいいや。なかなか、ギター披露しちやいなよ」

「え？いいの！」

乗り気なななか。ダメなわけ、あるものか、と彰は言った。

「義之君に聞いたんだけど、この音楽室には、エンゲルのスタックがあるんだって。出してくるから、オーバードライブ出して待ってて。あ、僕のバッグにディレイとかもあるから、それも使っている

よ

そして、ENGL INVADERのスタックを用意し、なかなかのセッティングをする。ストラップはFenderのモノグラムストラップ。シールドはBELDEN。

オーバードライブの聞き具合を調整し、アンプ側のドライブも確かめる。ENGLはハイゲインなアンプだ。歪み方も強烈だ。

イングヴェイ似のトーンで、「God Blessed Video」。アルカトラスはヴァイ時代の曲だ。

殆どがタッピングで構成されている曲。ヴァイの超絶技巧が解る。

「よし、っと」

彰のミュージックプレイヤーをスピーカーに繋げ、ギターを抜いたその曲が流され始める。

彰自身はベースだ。音楽室のAria Pro IIと、Genz Benzを拝借し、アンプのみで音を作り出す。

「せーのっ！」

ななかと彰の初ジャム。ジャンルを問わずにやれる彼らの実力。彰は言わずもがな、ななかのギターテクは、やり始めたばかりなのだが、ななかの物である。

タッピングのノイズの少なさ。弦に垂直に、指先だけを叩き付ける。離すときも同様だ。

フォー・フィンガーピッキングの彰も見逃せない。正確なベースライン。ゴリゴリ響く低音。原曲より多い音数。

もしかしたら、今のななかは義之より上手いかもしれない。彰はそう思った。

2 (前書き)

美夏とななかのチートっぷりにご注意下さい W

「どうもありがとう!」

ギターを手に、周りにお辞儀するななか。彰はストラップにベアスを吊したまま、観客と握手をしている。

「握手ありがとう!よければ、サインもください!」

サインペンと色紙を渡され、さらさらと書き、渡す。このようなファンとの関係を大事にすることに、ななかは尊敬した。

「彰せんぱーい!」

「あら、由夢ちゃん」

手を振りながら、彰にすることを示す由夢を見つけた。隣には、ホルスタイン柄の帽子を被った子がいた。

「友達?」

「はい。天枷美夏さん、つて言います」

「美夏だ。よろしく、成澤。それより、凄いな」

美夏は敬語を使わないが、彰は全く気にならず続けた。

「ありがとね、美夏ちゃん。君は、楽器に興味あるかな?」

「ああ!弦楽器は、お前を見て、特に!美夏もやってみていいか?」

「うん!はい、どうぞ」

ベースを美夏に手渡す。小柄な彼女と不釣り合いのように思えるが、格好なぞ問題無い。

「お前は、たしかこうやっていたよな？」

先程のベースラインを、寸分違わずやってみせる。周りから歓声が上がリ、彰が拍手をして美夏を褒めた。

「おお！！附属の二年がすげえ！！」

「天才だよ、美夏ちゃん！もしかして、ベースやってるの？」

「いや、初めてだ。美夏の頭の中には、こういうのも……」

スリーフィンガーで、なにやら聞いたことのあるメロディーを奏でる。Deep Purpleの「BURN」の、キーボードソロである。

更にどつと湧き、彰はテレキャスを出し、Twin Reverbに繋ぎ、バッキングを奏でる。

「なんだあいつ！！」

「すげえぞ、彰君とユニゾンだ！」

「おお、なかなかちゃんまでノツてきたぞ！」

美夏、ななか、彰のトリオ。何も知らない美夏とのジャム・セッションが、とても合っているとは思いつかなかった。

「イクよー！！」

「イっちゃえい！！」

なかなかギターソロに入る。原曲通りになぞり、開放弦を交えての速弾きから、トライアドフォームのスイープをしてみせる。

覚えてたてなので、流石に少し荒いが、それでも、彰の教え通り、きちんとミュートし音を分離させ、ピックを垂直に弾き切りながら、ノイズの除去と粒立ちを立たせる。

ところどころペンタトニックでアドリブを入れながら、なかなかから彰へとソロを交代する。

彼もスイープをするが、六弦の下降、上昇を織り交せている。

フリジアンから、ハーモニックマイナー、リディアンへの移行、そしてストリングスキッピング。

アウトサイドから挟るように弦を弾き、そのスキッピングをしながらラッシュュをし始める。

「おい！！なんだあれっ！」

「すごい、手が見えない！！」

無影手の名のごとき速度。テレキャスでラッシュュは合わないかもしれないが、それよりも速度のインパクトの方が大きい。

逆手スイープから、エイトフィンガータッピングへ移行し、B URNの原曲をぶち壊した。

彰の曲にしか聞こえない。

タッピングの速度を上げつつ、ボディからネックを覗き込む様を持ち、変則スイープタッピングを披露する。テクニク云々の領域ではない。腕力と空間把握能力能力の問題だ。

「変態だ！！変態がいる！！」

「しかも、カッコいい変態だ！！」

変態コール。その姿勢で、タッピングからピッキングに変え、まともやストリングスキッピングを試みる。変態から宇宙人へとコールが進化した。

「成澤ギター星から来た王様だ！！」

「すっごお！！」

最終的に、その体勢からラッシュをする。ギターの弾き方は決まっていない、と言わんばかりのスタイルだ。

ギターを投げ、背中越しにキャッチし、それでピッキング。速弾きで締めて、ピックを投げ飛ばして演奏を終えた。

「フリーダムだ！フリーダムさんだ！」

「成澤くんも白河さんも凄かったけど、あの女の子は何者なの？」

アマチュア二人、しかも初心者が、ここまで合わせられるとは、誰が思っただろう。

セッションの仕上がりに感動したのは、観客だけでなく、彰達もだった。

「美夏ちゃん、やるじゃん！」

「成澤には及ばんさ。しかし、白河も流石。成澤に教えて貰ったこととはあるな」

「いやあ、私はまだまだ未熟だよあ」

謙遜するななか。そんな所を見せ、ななかのギターのファンは増えていく。

「ななかちゃん、ソウルなギターありがとう！」

「今まで外見でファンになってた！ごめん！魂のギターの虜になった！！」

色々な声が聞こえるが、人気が上がったのは事実だ。しかも、技術面を見たファンの。

「成澤くん！これからも、白河さんのギターを宜しく！！」

「天枷えっ！！お前も、成澤君にベース教わって、更にすげえもん見せてくれよおっ！！」

美夏にも新たなファンが増えた。人間嫌いな彼女ではあるが、どこか心地好い感じがした。

「上等だあっ！！クリパで、美夏のグレードアップしたベースを見せ付けてやる！！愉しみにしてるよっ！！」

「いいね、その強気な発言！！カッコいいぜ天枷！！」

「天枷さん、白河さん、頑張ってるっ！！」

彰のやる事が増えそうだが、それでも嫌な気はしない。楽器を教えることは苦にならない。

「成澤先輩も、頑張ってる下さいねっ」

「ありがとう、由夢ちゃん。いやあ、教えがいがありそうだ」

ニコニコと笑う彰と由夢。

また一人、彰に弟子が増えた。

3 (前書き)

書いてる途中で何がなんだかわからなくなったWWW

ななかと共に家に帰って、スタジオに真っ先に入る。ホワイトボードを出して、マーカーで何かを書き出した。

「さて、ななか。今までやった理論に、更にもう一つ加えるよ」

ホワイトボードには、『R・M・B・C・F』と書かれている。ななかが頭を傾げた。

「なにそれ？」

「これらはジャンル。これにあつた演奏をする時、頭の中で考えることなんだ。Rock、Metal、Blues、Country、Fusion。頭文字だね」

多彩なジャンルを演るための、彰のスタイル。彼は必ずこれに基づき、そこから派生させる。

「ギターを教える時も、僕は必ずこれを考えていた。最終的に、これを君にも教える。まあ、これは勝手に身についていく物なんだけどね」

「へえ……。これをマスターすれば、大抵のジャンルは演奏出来るの？」

「うん。これは、誰にも教えてない、じいちゃんもばあちゃんも、雑誌も知らない。本当に教えたい人にしか教えないんだ」

「えっ？」

なんで、自分に教えるのだろうか？

とても疑問に思う。ななかは、彰の眼を見た。

「どうして、私に教えてくれるの？」

「君は、僕よりもギターの表現力を引き出せると思ったから。後は……。君は、ここでの初めての友達だから」

かなり期待を寄せられている。そして、私情もかなり入っている。しかし、ななかが思っていたこととは違った。

「それだけ？」

「うん」

「な、なんだあ……。そつかあ……」

あはは、と笑いながらも、ぼろぼろと涙を零す。彰が驚き、ななかに声をかけた。

「ななかつ！？僕、なんか悪いこと言っちゃった！？ごめんねっ！？」

「ち、違う……。彰くんは、何も悪くないよっ……」

「あわわっ……」

動揺する彰。どうしたらいいのか判らない。

「私でも、何で泣いてるのか判らない……」

「え、ええっ……」

手の付けようが無い。彰は困った顔をする。

ななかは彰に抱き着き、顔を隠した。更に彰が困る。

「ななか？大丈夫？」

「彰くん……」

「タオル持ってくるね？顔拭いて」

ななかを優しく離し、ゆっくりとタオルを持ってくる。その動作は、どこか挙動不審だ。

「はい、タオル」

「ありがとう……。ごめんね」

彰は動揺がまだ隠せない。身近な女の子が泣いたのなんて、始めてだからだ。

ななかがMajorのスタックに寄り掛かり、膝を抱えて座っている。

彰もそのスタックに顔を突っ伏した。スラントの右上のスピーカーに顔が当たる。

「ごめんね、ななか……」

「彰くんは何も悪くないよ……。泣いちゃって、ごめんね」

「いや、僕に落ち度があったんだよね……。僕の気が付かない所で、ななかを傷付けちゃった……」

彰がななかの前に正座で座り、頭を地面に付ける。土下座である。

「あ、彰くんっ！？」

「ごめんなさい……。もう、傷付けないから……」
「いやいやっ、違うからねっ！？顔上げてよっ！！」

その通り、顔を上げ、ななかを見た。

「彰くんは、本当に、何も悪くないんだよ？私は……」
「え？」

「本当に、私もわかんないんだよ。嬉し泣きなのかもしれないけど……。悔し泣きかもしれない」

何が悔しいのか、ななかも、彰も判らない。彰がまた困惑する。

「色々と困らせてごめんね？」

「……いや、いいよ。考えすぎるのは、僕の悪い癖だから」
「なんか、謝ってばかりだね、今日は」

ななかは軽く笑う。そして、彰の頭を撫でた。

「何がなんだかわからないや、今日」
「うん……」

座りながら話す二人。彰は脚を伸ばし、後ろにあるギタースタンドに寄り掛かった。ヤイリのギターがちょうど頭にある。手に取り、F7を押さえた。

続けて、Blackmore's Nightの「Minstrel Hall」を弾きはじめる。心を落ち着かせたいときに彰が弾くナンバーだ。

心地好いナイロン弦の響き。優しい音色に、ななかは心を奪われ

た。

私は、彰くんが好きなのかなあ……？

友達という言葉に引っかけた感じもした。心に靄が生まれた気がした。微かに、誰かの顔が見えた気がする。

そんなことを考えながら、蘇った中世の音楽家の旋律に、ななかは浸かっていった。

Session 7 Live!!

クリパ当日。ななかと彰の間に、少しだけこそばゆいような感じがあったが、あまり気にはいけない、と二人は思って、出来るだけいつも通りに接した。

クラスは皆臨戦態勢。彰のレンタルギターで、既にウォームアップをしていた。

「ななか、指の体操をしっかりね」

「うん」

今となっては、すっかり相棒となった、赤のストラトをギグバッグから出した。センターの結線を外し、下げている。また、トレモロも太い物にするなど、改造をしていた。

これまた彰から貰ったMarshall 2466にDOD 250を噛ませて繋ぐ。少しヘヴィに歪んだ、ハイとミドルが高めのトーンが、ななかの音だ。ダイナミックレンジスイッチも入れてある。チューブは5881管に取っ替えた。

スケールから始まって、スイープの動作に入る。この前より精度の高いピッキング。タッピングまで入れて来るのだから、かなり上達している。

彰も、MABを取り、MAJORに、いつも通りに繋いで、ななかを上回る速さでスイープをした。そして、ストリングスキップ

ング、運指のアップ。彰の運指は弦を撫でているように見える。無駄の無い、洗練された指使い。

スーパーギタリストの手は、まるで機械の様に正確で、しなやかで美しい。

「君、小指が二トだよ」

「あんまし力が入らなくて……」

「それじゃ、クロマチック練習だね。ななか、教えてあげて」

ななかも、簡単な事なら教えられるようになった。今のレベルは彰未満、義之以上だろう。

「そうそう、上手!!」

「そう?」

褒めて伸ばす、それが彰とななかのやり方。タッピングも確認し、クラスメイトにOKを出した。

「うん。みんな上手になったよ。ここで、一つのレッスンだ。僕はギター弾かない」

「え?」

「代わりに、ドラムに入るよ。そこで、この表のメンバー達で、この時間帯にやってほしいんだ」

鞆から、藁半紙を出した。紙を広げると、グループと時間帯が見やすく書かれていた。

「ずっとやるのは僕のドラムだけ。他はその通り。みんなぶっ続けだと疲れちゃうでしょ?」

「うん」

「ドラム役だった子は、僕が疲れたら、入ってほしいな。その時は連絡するからね。アンプは……まだかな？」

彰が言うと、タイミング良く扉が開いた。創龍と、その他の生徒達だ。手には、Marshallのコンボアンプ、2466Cを持っていた。

「待たせたな。これでいいか？」

「はい。ありがとうございます」

床に置かれるマーシャル。ベースも4510のチューブコンボだ。マーシャルユーザーの彰の愛が伺える。

「神威先生、あとこれを体育館に」

「あいよ」

キャビネット群を一つずつ持っていつてもらおう。レンタル用としてだ。無論、Majorもだ。Majorを使わせても、彰の音のヒントが出るわけではない。

相当重いMajorのヘッドを、4つ程まとめて片手で持ち上げる創龍。それを見た彰が絶句した。

「ん？どうかしたか？」

「それ、1台40Kg近いんですよ？」

「40なんて軽い軽い」

この男は化け物か。彰は心からそう思った。

「ハーフキャビだとスペースを取りすぎちゃう。コンボなら、省スペースで、デカイのを出せる」

「使い方は、この前のと一緒ですか？」

「うん。チューブだから、飛んだったら言ってね」

メカにも強いギタリスト。心強いばかりだ。脇には、6550管が大量にある。バイアス調整も、彰が改造してある。

「ああ、扇風機も回しといて」

冬ではあるが、チューブアンプのオーバーヒートを避ける為だ。小型の扇風機をアンプの近くに置いた。

最後に、彰のオルガンとドラムセットをセッティングした。これで準備万端。後は、客が来るのを待つのみだ。

ななかの出番はまだの為、一人で小恋達のクラスに行った。2・3は人形劇だそうで、小恋がヒロイン役、義之が主人公役を務めるようであった。

公演は、ななか達のクラス・2・4のちょっと前の様だ。準備中の教室に入ると、涉や茜が慌ただしくしていた。どうやら席が足りなく、そしてセットも人が箱詰め、触れそうになっていた。

「白河さん！？ごめん、今」

「立見なら、大丈夫かな？」

「あ……、うん」

一番後ろの、空いている所に収まった。学園のアイドルが一人、そこにいるのだ。狙う男はたくさんいるだろう。

だが、何故かその日のななかには、誰も近付こうとはしなかった。

場所は変わり、彰達の部屋。少し音合わせをして、リハーサルもやった。

直径26インチの大きなバスドラムが二個、それぞれ巨大なタム、シンバル、スネア。スティックも相当重いものになっている。

バスドラムペダル　デーモンドライバーを、超高速で踏む。重低音が連続で鳴った。腹に響き、周りの教室にも聞こえる位の音量だ。

「成澤くん、このオルガン重くね？」

「そのオルガンは、色々秘密があるんだよ。300kg超えてるんだけど、その分、リバーブとか色々あるんだ」

オルガンへの質疑応答。しかし、彰も全てを知っているわけではない。

祖母だけが、オルガンのスパイスを知っている。

2 (前書き)

ななかのギターの設定を忘れていました。

・ギター

Fender USA Stratocaster (CAR/M)
'73年製

PU: Lace Sensor Gold x 2

センターはダミー

ノイズ処理: 銅箔

ペグ: Sperzel Trim Lock

ナット: グラフテック TUSQ

フレット: JD #6100

ストラップピン: Jim Dunlop SLS1401N

ストラップ: Fender モノグラムBLK-YEL-BRW

他はオリジナル

・アンプ

1. Marshall 2466 1960の三段積み

2. Marshall 1959 Super Lead '74

年製 (M.volt付き) + 1960Vの三段積み

計二つ使用。

2466 set ダイナミックレンジ: ON, M.volt: 4, Vol: 4, Reverb: 3, High: 5, Low: 4, Mid: 6, Pre: 1.5, Mid Boost: ON
1959: M.volt: 7, Vol: 8, High: 4, Mid: 7, Low: 5, Loud: 1.5, Pre: 1 Hi Top

Boost

・エフェクター

DOD 250 Preamp) Gray Color)

Gain: 9時方向

Lv.: 12時方向

T-REX REPTILE 2 (テープエコー)

VOX V846 - HW フラベタル

MXR M-102 Dyna Comp コンプレッサー

Z-CAT Tri Mod - 1 (フランジャー/フェイザーの

みの使用)

BOSS FS-5Ux3

RADIAL Bones TwinCity A/B ラインセレクター

NOAHARK AC/DC - 1 (パワーサプライ)

シールド

・MONSTER CABLE

ライブが始まる2分前。彰の教室内は人で鯨詰め状態になっていた。手作りの舞台袖で、彰以外は緊張していた。

「ミスれねえな……」

「ミスっても大丈夫だよ？ライブでミスは逆に新たな可能性が出るから」

彰がニコニコ笑いながら言った。気を軽くさせようとしたのだろう。しかし、更に固くなってしまった。

少し罪悪感を感じた。皆が皆、彰の様な思考を持ち合わせている訳ではないのだ。

何か、他の言葉を考えよう。そう、皆が楽しめるような。

「皆。これは皆も楽しまなきゃダメなんだよ？楽しんでやろうよ。面白くやろうよ」

「楽しむ？」

「うん。気楽に楽しもう」

これでどうだ。彰の狙い通り、皆のやる気は出てきた。これでダメだったらどうしようかと彰は思った。その心配が失くなってきて嬉しい。

「皆、開始5秒前です」

開始合図が出された。彰は先にドラムに行き、スローンに腰掛けると、馬鹿デカイ音で、バスドラムとスネアを叩き始めた。

ドドドコという低音。途中でスネアで止めて、他のパートを呼んだ。

いきなり「Crazy Doctor」から始まる。ダブルノートの8分リフ。ツীবラスで裏拍を取りながら、クラッシュシンバルとスネアでラウドに仕上げる。

ギターとベースのボリウムはわからない。セッティングは個人に任せてある。ここまでは彰が関与する必要は無い。

自分の音を作り出すのは、確かに人の手助けも必要だが、大抵は自分でやるものだ。確かに、彰のアンプはブラックモアの音で、オリジナリティは無いかもしれないが、それでもリッチーとは奏法が異なっている為、ピッキングノイズや音の粒は全くと言っていいほど違う。これが違えば、リッチーサウンドから、アキラサウンドになる。

今演っているCrazy Doctorでも、ギターはゲインが高めで、オーバードライブも引き起こして、ミドルを上げているし、ベースはローを10にして、ギターを食おうとしている。このオリジナリティがあるから、楽器というのは面白いし、楽しくもなる。

パワーヒットしながら、味を出すも、ボーカルを活かすようにドラミングする。ちゃんとボーカルのポイントもした。腹から、とても大きな声で、力負けしないように頑張っている。

「面白い……」

もつとやらかしてもいいか、と彰は思い、ツーバスの速度を上げ、皆を煽った。あまり目立たなかったオルガンがまずそれに乗った。

このオルガニストはなかなかのモノだ。アドリブをうまくキメてくれる。音数やら、ハーモニーやら、計算し尽くした奴だ。彰の眼にそれが留まると、にやりと彰は笑って、オルガニストに合図した。

『後ろからギターを盛り上げて』

そろそろギターソロに差し掛かる。ゆっくりなテンポから、いきなり速弾きになるのだ。ライドシンバルを鳴らしながら、オルガニストに示すと、ウインクで返された。

オルガンが入るソロ。ピッキングノイズは少ないものの、もたつきがある。カバーする様にオルガンが演奏した。

鍵盤の一つ一つを、自分の思い通りの音にしていく。プロの為せる技。多分ピアニストだろう、と彰は推測した。

サークルピッキングから、ライトハンド。ここが決まらないと、全てが台なしになってしまう。

だが、その心配は無かった様だ。

緊張して、テレフォンタッピングという、高速タッピングになっている。嬉しい誤算だ。右手中指と左手小指での電話音。こちらも面白い、と彰だけでなく、会場にいる観客も思った。

ちゃんと指のエクササイズをしているから、テレフォンタッピングが出来たのだろう。この冬の季節に、ここまで指を動かせるのも、エクササイズのおかげだ。エクササイズをやらないと、指が冷えたままのフィンガリングになり、腱鞘炎になってしまうことがある。

教え通り、しっかりやっているようでよかった。ベースもしつかり音を出せている。

彰も負けじとスネアとフロアタムをドカドカと鳴らす。二個のタム、ドラム缶の様なスネア、ド迫力のバスドラム。巨大UFOなシンバルをバチでひっぱたき、音圧と音量を増加させた。

他の楽器を喰うつもりだ。一つのリード楽器になっている。コージー・パウエルの進化形態が、ここにある。

義之と小恋の熱演の最中、バスドラムの音が、なかなかにはしっかりと聞こえていた。

周りの観客もそれに気付いたらしい。しかし、微かな音の様だ。

「Soldier Of Fortuneかぁ……」

F#から始まる、ボスハンズ・タッピングの曲。彰のドラムが他を喰う様子が容易に想像出来てしまう。

「ありがとうございましたー」

人形劇が終わると、そそくさと出ていく義之と渉、小恋が見えた。続いて杏と茜。更には3組委員長・沢井麻耶までも。

自分の出番も近い。廊下に出ると、美夏、由夢、音姫と、生徒会副会長・高坂まゆき、そして見知らぬ金髪の、附属一年の女子。

ななかに気付いた音姫が、声をかけた。

「あれっ、白河さん？なんでここに？」

「私のクラス、このような感じになってまして」

役割分担表を出した。公演の時間と、名前とを見て、納得するが、裏の一般公開の一番下のモノだけ、何か解らなかった。

「何、この『Speed Kills』って」

ななかが言われて初めて気付いた。しかし、なぜだか予想がついてしまう。

「多分、シックスギターの出演です……」

「へえ……、って！あの、兵器みたいなやつ！？」

最後の最後でやらかすと思った。ワンマンショーだ。しかも、会場が体育館。クリパに見合わないスケールだ。

とてつもない人ばかりが出来るだろう。また、雑誌やレコード会社なども殺到するに違いない。

あのローデイも来るはずだ。全力の大道芸になる可能性がある。

「あの……。そんなに凄いのですか？」

「うん。演奏する成澤くんが人間離れしてるもん。ムラサキさん、明日のこれも見ようよ」

「音姫先輩のイチ押しなら、行かない訳にはいきませんわ」

楽しみの次は、多分新たな境地に入るだろう。ムラサキ エリ
カが、壊れなければいいが。

「あれ、この紙、次白河さんが出るのになってるよね？」

「はい。だから、ウォームアップしに教室戻らないと」

ストラトも教室に置いてある。アンプも暖まってはいるだろうが、
サウンドチェックがまだだ。エフェクターの調整もしていない。

「よかつたら、公演前に聞きますか？」

「え、いいの？」

「特別です」

困ることはないはずだ。ななかは躊躇うことなく彼女達を連れて
いった。

2 (後書き)

ついで、彰も。ギターは流石に省略させていただきますw

・アンプ

Marshall Major 1967 + 1960 ・ 72年
製x6

・エフェクター

1・A I W A T P - 1 0 1 1 o r B S M R P A M A J O R
2・N o . i C O M P A C T P H A S I N G " A "
3・A / D A F l a n g e r
4・T - R E X O C T A V I U S
5・T O N E R I D E R S u p e r L u s h A n a l o g C
h o r u s
6・J i m D u n l o p G C B - 9 5 C R Y B A B Y
7・C u s t o m A u d i o J a p a n R S 6 1 6
8・6口 1口にする中継機
(エフェクター切替に1、アンプ切替に1、)

シールド：Providence

弦：PICATO RB77

おまけで義之。

・ギター

Ibanez 340Z 緑

フロントにFS-1、リアにSuper Distortion

・アンプ

彰から貰った

G e n z B e n z E L D I A B L O 1 0 0 H + T S 4 1 2

・エフェクター

なし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8237s/>

D.C.II-Long Live Rock'n'Roll-

2012年1月6日13時45分発行